

# 関山

かんざん

第27号



寺報 中尊寺

目次

寺報 グラビア

「自浄其意」

貫首 奥山 元照 書

自から其の意を浄くする

奥山 元照 8

平泉世界遺産登録十周年記念

第六十回平泉芭蕉祭全国俳句大会

特別講演

光堂とはなにか

長谷川 權 11

「文化の泉」

七宝荘厳と金銀和光

佐々木邦世 25

東日本大震災から十年

菅原 光聰 28

世界遺産登録十年を振り返って

菅野 澄円 34

令和二年の金色堂修理工事について〈報告〉

島原 弘征 40

薬師堂落慶に思う

三浦 章興 48

平泉世界遺産ガイドランスセンターに期待すること

菅野 康純 53

八重樫忠郎 56

香りにのせて伝えたい、平泉

南洞 法玲 58

関山植物誌〈12〉

破石 晋照 63

「妙なる教え」

菅野 宏紹 64

十分間 H-1法話グランプリ2021に参加して

破石 晋照 66

風信／語録（郵便受けから）

71

桜の開花にちなんで ―四月十日日本堂法話より―

佐々木五大 72

中尊寺「役僧」のはじめ

光勝院での坐禪指導体験

黒澤 崇泰 76

新刊紹介

一枚の写真から〈4〉

北嶺 澄照 83

関山句囊・歌籠

御神事能番組

84

陸奥教区宗務所報

御奉納者 御芳名

97

浄財御奉納者 御芳名

赤堂稻荷鳥居建立寄進 御芳名

99

不動尊篤信御奉納者 御芳名

執務日誌抄

100

〈表紙〉東日本大震災物故者追善回向祥月命日法要

令和三年三月十一日



紅葉銀河「経蔵法楽～声明の夕べ」  
(令和3年11月6日)



紅葉銀河（令和3年10月29日～11月14日）  
11月12日に撮影された一枚。散った紅葉が広がり、絨毯のように。



中尊寺中興第二十九世貫首 奥山元照権大僧正晋山式  
（令和3年5月11日）



本堂前にて（令和3年11月14日）  
この頃は修学旅行の生徒達も多かった。菊まつりは規模を縮小して開催。



弦楽四重奏Mカルテット 奉納演奏（令和3年11月13日）



東日本大震災物故者追善回向祥月命日法要（令和3年3月11日）  
本堂に於いて法要後、慰霊供養塔前にて読経・焼香が執り行われた。



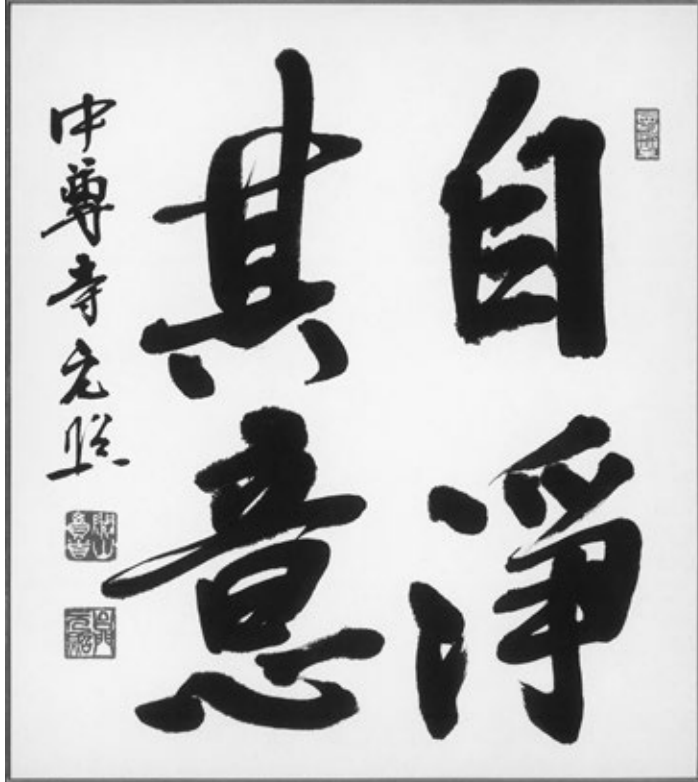
「大文字送り火」火床づくり（令和3年8月9日）  
平泉中学校2年生が東稲山駒形峯に登り、汗を流した。



平泉芭蕉祭全国俳句大会（令和3年6月29日）  
開会式後に児童・生徒の部の表彰式。午後は長谷川 権氏の特別講演が行われた。  
(講演録11ページ)



郷土芸能奉演 朴ノ木沢念仏剣舞（令和3年11月3日）



貫首揮毫



奥山元照貫首 世界遺産登録10周年記念講演会にて講演（令和3年12月11日）



秋の藤原まつり 稚児行列（令和3年11月1日）

# 自みづから其その意こころを浄きよくする

中尊寺 貫首 奥山元照

昨年、走行中の京王線の車内で、ナイフで切りつける傷害事件が発生し複数のの方がケガを負いました。その後放火により車内で火災が発生、乗客が逃げ惑う様子がSNSに投稿され、日本中が一時騒然となりました。この事件は八月六日に小田急線の車内で起きた傷害事件を模倣したもので、その後さらに十一月八日には九州新幹線の車内で放火未遂事件が起きるなど、車両内での事件が連続しました。

思い通りにならないストレスのはけ口を、安易に不特定多数の人へ向けた過激な暴力行為に訴える事件が頻発しているように思われます。一昨年から二年以上の長期に亘るコロナ禍も影響しているのか、若年層の持つバーチャルの世界と現実の世界の境目が薄れているのか、ストレスのはけ口がこういった犯罪に形を変えているのではないかと危機感を感じざるをえません。

仏教の教えを表わした言葉に、七佛通戒偈しちぶつうけいげという偈文があります。それは、「諸惡莫作しよあくまくさ 衆善奉行しゆぜんがぎよう 自浄其意じじようしい 是諸仏教ぜしよぶつがう」の四句からなります。

その昔、中国唐の時代、詩人である白居易が、禅僧である鳥窠和尚ちよつかに「仏教の真髄とは何か」と質問したところ、「諸惡莫作・もろもろの悪を作すこと莫く、衆善奉行・もろもろの善を行うことである。」と答えました。白居易は「そんなことは三歳の子供でもわかるではないか。」と言ったところ、和尚は「三歳の子供でもわかるが、八十歳の老人でもできないだろう。」と答えたと伝えられています。

そして、その善い行いによつて、「自浄其意・みづからその意を浄くすること」が、「是諸仏教・これがもろもろの仏の教えである」ということです。

しかし、善い行いをするためには、自ら其のこころを浄く高めなければなりません。自らのこころを浄め高めるということは、全ての事柄を分け隔て無く、総合的、多角的に観察して、全ての存在が平等であるという仏様のこころになることなのだと思います。

ここであらためて思い起こされますのは、平安時代末の戦乱の続く中、多くの戦いにより自らの家族全てを失いながら、その怨念という苦難を乗り越えた、奥州藤原初代清衡公の高貴な発願であります。清衡公は、力による対立ではなく、お互いの違いを認め合い、お互いを尊敬しながら共に生きていく慈愛共生の道を非戦の誓いとともに志しました。

大和政権成立以来、長きにわたり中央政府征夷軍の名のもと、陸奥の国各地で行われた多くの戦いの歴史に終止符を打つために、鎮護国家大伽藍一区の中尊寺を建立供養し、仏教の教えのもとに敵味方の区別なく、懺悔罪障により心を浄化して、生きとし生けるものすべての成仏を祈願して怨親平等

の心まで高めていくことが平和への道であることに目覚め、安らぎの浄仏国土をこのみちのくの地に顕現したのでした。

みちのく平泉の人々は、その清衡公の深い祈りの誓願を大切に今日まで受け継ぎ伝えてきているのです。

仏教に説く戦いとは、決して他人との争いではなく、自分自身との戦いではないでしょうか。その自分との戦いこそが、「自浄其意・自ら其の意を浄くすること」ということであると思います。

日々の生活の中で困難な事があれば、その原因の矛先を他人に向けるのではなく、もう一人の自分をドローンに乗せて一度空の上から今の自分を眺めてみてはいかがでしょうか。そうすると、今まで見えなかったこと、今までは避けていたこと等が見え始めて、現在の状況を積極的に受け入れて、新たな自分自身に挑戦していく工夫をすることや、自分の人生を切り開いていくことができるのではないかと思います。

コロナ変異ウイルスの出現などがあり、まだまだ予断は許さない状況ですが、清衡公の示された「自浄其意」の教えに学びながら、自分自身と向かい合い、今出来ることから一歩ずつ進んで参りたいと思います。

第六十回平泉芭蕉祭全国俳句大会 特別講演

## 光堂とはなにか

講師 長谷川

権 先生

### 現代の「時代の空気」

今日は「光堂とはなにか」という話をいたします。その話に入る前に「時代の空気」について話したいと思います。

皆さん覚えて居られるかどうか、一九九一年（平成三年）、この年のクリスマス十二月二十五日にソ連（ソビエト社会主義共和国連邦）が突然崩壊しました。僕はその頃、読売新聞の記者をしていて新聞を作っていたのですが、国際部のデスクがやってきて、小さな声で「ソ連がなくなりました」と言った。すぐ編集局中大騒ぎになって「ソ連崩壊」という大見出しの新聞を作ったわけです。

この「ソ連崩壊」はじつは戦後の大きな節目なのです。というのはソ連が崩壊するまでは東西

冷戦が半世紀近くつづいていたのですが、「冷戦」がどうはじまったかという点、一九四五年（昭和二十年）八月六日の広島原爆、九日の長崎原爆、この二つの原爆投下で日本は戦争に敗れ、と同時に第二次世界大戦が終わりました。

原爆によって戦争が終わったために世界の構造がガラッと変わりました。どう変わったかという点、ソ連側もアメリカ側も原爆を持っているわけですから、核戦争になったら地球全体がとんでもないことになります。それはみんなわかっている。そこでお互いに核兵器を使わずに脅しながら牽制し合う、これが冷戦時代です。

この冷戦が一九九一年までつづきました。よく「戦後七十五年経った」などといいますが、戦後というのは冷戦時代のことです。一九九一年に終わっているのです。冷戦終結によって戦後とは違う新しい時代（現代）がはじまりました。

では、冷戦終結後の現代はどんな時代かという点、冷戦中はたとえば日本国内の政治をみると西側の自民党（保守）と東側の社会党（革新）を





講演の様子

中心にした二つの陣営がお互い牽制し合いながら政治をしていました。ところが冷戦後は東側の後ろ盾だったソ連がもはやありませんから「保守対革新」という単純な対立の図式が成り立たず、今の混沌とした政治状況がはじまっています。

この冷戦後の混沌とした現代を「グローバル化の時代」という人もいます。冷戦が終わったとき、評論家たちが「次はグローバル化の時代だ」といった。そこで「これから全部世界が一つになってグローバル、地球全体が一つになってやっていく時代なのだ」とみんな思った。地球にはいろんな民族がいて、いろんな文化がある。それらの文化がお互い切磋琢磨しながら地球という一つの共同体を作り上げていくのだと一瞬だけ思ったのですよ。ところがこの新しい時代がもう三十年もつづいているのにグローバル化が進んだのは経済だけで、文化は置き去りにされたままです。

ソ連が崩壊した一九九一年は平成三年ですから、平成のはじまりと冷戦後のはじまりは、ほぼ重なる。ということは昭和は戦争と冷戦の時代、

次の平成以降は別の新しい時代と考えたほうがいい。さらにその十年後には二十一世紀がはじまりました。

冷戦終結後の現代は、はたしてどんな時代なのか、全体の姿がまだよく見えないので何ともいえません。この「よくわからない時代」の中でまず一九九五年にはオウム真理教による地下鉄サリン事件、二〇〇一年九月十一日のアメリカで同時多発テロ事件が起きました。そんな得体のしれない事件も次々に起こる。これが現代の「時代の空気」です。

### 芭蕉が生きた古典復興の時代

「時代の空気」の問題は今日お話しする光堂の話と深く関わっています。どう関わっているのか、これからお話しします。さっそく『おくのほそ道』の中尊寺のくだりを平泉町観光商工課の小野寺崇さんに読んでもらいます。

三代の栄耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、

金鶏山のみ形を残す。まづ高館に登れば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。泰衡らが旧跡は、衣が関を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても、義臣すぐつてこの城にこもり、功名一時の叢となる。「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落としはべりぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房見ゆる白毛かな 曾良

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散りうせて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に顔廃空虚の叢となるべきを、四面新たに囲みて、藁を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

ありがとございました。もうちょつと歌うよ

うに読んでもらえるともっとよかったかな。(笑)あまりいうと余計緊張するとよくないのですが、肩の力を抜いて読んでもらえればいいのです。

平泉のくだりを平泉で、しかも金色堂のすぐそばで読むとなかなか感慨深いものがあります。平泉の方は大変恵まれている。どう恵まれているかという『おくのほそ道』の経路にある市や町ではそれぞれ俳句大会をやっています。ここ平泉のくだりには芭蕉の句が二つ、曾良の句も合わせる。三句も出てくる。きょうのような俳句大会をするのは当たり前かとも思うのですが、一句もないのに頑張っている市もあります。たとえば埼玉県草加市は「其日暫早加(草加)」と云宿にたどり着きにけり」という一言だけです。それでも奥の細道文学賞や俳句大会を全市でやっている。

いま、読んでもらった最後の「五月雨の降り残してや光堂」という句、これが今日のテーマです。「光堂とはなにか」とは芭蕉はこの句で何を皆さんに伝えようとしたのかということです。

芭蕉を読むとき、ぜひ知っておきたいことがい

くつかあります。一つは芭蕉は東西冷戦後の現代とはまったく違う「時代の空気」の中で生きていたということです。

芭蕉も人間であり日本人だから私たちと同じような思いで生きていたのだろうと思っているかもしれませんがここが誤解です。時代が変われば人間の考え方は変わる。さきほど現代の「時代の空気」について話したのは、このことを皆さんに実感として捉えてもらいたかったからです。一九九一年の冷戦終結を境として時代の空気がガラッと変わっている。その変化を私たちは意識しないけれども、今日からはこれを意識してどうすればいいのかを考えながら、生きていただければよいのです。「まだ戦後だ」という意識のままです。自民党や野党に任せていればいいかなと思うのですが、そうはいかないのがこれからの時代です。

では芭蕉が生きた時代はどういう時代だったのかということですが、芭蕉が生きたのは一六〇〇年代、十七世紀の後半です。

日本は一四〇〇年代の後半、応仁の乱(一四六七

〜七七)が京都でありまして、これ以後、慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の合戦まで、実はずっと戦乱の時代が続いていた。今からは想像できないような時代だった。応仁の乱は大名たちが覇権を争って京都を舞台に繰り広げた戦乱ですが、全国に波及して、戦国時代に入る。この応仁の乱から百三十年の間にそれまで培われてきた王朝・中世の文化、たとえば『源氏物語』や『古今和歌集』、建造物や美術品、その大半が焼失したり散逸してしまっただけです。百三十年間戦乱が続くという、いま中東のイスラエルやアラブ諸国で戦争や内戦がつつづいています。せいぜい七、八十年です。

あのような内戦があると五十年も続くと想像してください。気の遠くなるような内乱、内戦の時代がかつて日本にあったということをお私たちは忘れてしまっている。

江戸時代のはじめ、十七世紀の人々、芭蕉もその中に含まれますが、彼らには内乱の記憶がまだはっきりと残っているわけです。長い戦乱のあと、やっと太平の世が訪れたと江戸時代前半の人々は

思っていた。そこでその内乱で滅んでしまった王朝・中世の文化を、江戸時代に新しい文化として復興させようという気概を持って彼らは生きていたのです。

この空気が単に政治の指導者、幕府や藩だけではなく津々浦々まで広がっていた。いわゆる文芸復興、ルネサンスの気運が満ち満ちていたのです。これが江戸時代前半の「時代の空気」です。

芭蕉を読むときはこのことを思い出していた方がいい。芭蕉は古典復興、文芸復興の志をもった人であったことを忘れてはいけません。芭蕉は古典主義者であり芭蕉の文学は古典主義文学なのです。芭蕉の俳句も『おくのほそ道』も一句一句、一言一言に古典の下敷きがある。それがわからないと『おくのほそ道』は読み解けない。古典を俳句という江戸時代の新しい形にして復興したいという風に考えている。芭蕉は王朝・中世の『源氏物語』や西行の歌を、俳句という新しい形にして蘇らせたいと考えていた。

この痕は『おくのほそ道』にも満ち満ちて、全

部挙げるときりがありませんが、一つだけ仙台の宮城野のくだりを読んでください。

宮城野の秋茂りあひて、秋の景色思ひやらる。玉田・横野、躑躅が岡はあせび咲くころなり。日影ももらぬ松の林に入りて、ここを木の下といふとぞ。昔もかく露ふかければこそ、「みさぶらひみかさ」とはよみたれ。薬師堂・天神の御社など拝みて、其日は暮れぬ。なほ、松島・塩竈の所々、画に書き添えて贈る。かつ、紺の染緒付けたる草鞋二足饒す。さればこそ、風流のしれ者、ここに至りてその実を顯す。

#### あやめ草足に結ばん草鞋の緒

いま、読んでもらったところに歌枕が次々に出てきます。歌枕は王朝、中世の文化遺産です。それをこうして『おくのほそ道』に取り入れていく。この宮城野の前にはこんなことが書いてあります。

名取川を渡つて仙台に入る。あやめ暮く日なり。旅宿を求めて、四五日逗留す。ここに画工加衛門といふ者あり。いささか心ある者と聞きて、知る人になる。この者、「年ごろ定かならぬ名所を考へ置きはべれば」とて、一日案内す。

ここに画工加衛門という人物が出てきます。「年ごろ定かならぬ名所を考へ置きはべれば」分からなくなつてしまつた歌枕の名所など調べておいたので、これから案内します、といっています。さらに塩釜や松島の地図を描いてこの通りに行きなさいと教えてくれる。この画工加衛門は付近の歌枕を調査している。今でいうと郷土史家です。このような人が仙台にかぎらず、全国各地にいた。当時の「時代の空気」文芸復興の意志は幕府や藩だけでなく広く人々の間に行き渡っていたということです。

たとえば伊達藩の場合、領内のいくつものお寺を復興している。中尊寺もそうです。ほかに松島

の瑞巖寺、伊達の分家が復興した山形の立石寺というふうに、長い内乱の時代に滅んだお寺や、それと『おくのほそ道』には奥浄瑠璃が出てきますが、これも伊達藩が保護していました。こういう文芸復興の空気が満ち満ちた中で『おくのほそ道』は書かれたことを、まず知っておかなくてはなりません。

芭蕉は十七世紀の文芸復興の時代を生きた古典主義者であり、文芸復興が江戸時代前半、十七世紀の「時代の空気」でした。これが最初にお話した戦後の冷戦時代の「時代の空気」さらに冷戦後の得体のしれない「時代の空気」と同じように、これをよく知らないとその時代はわからない。年号や人名をあれこれ覚えるのが歴史の勉強ではなく、この「時代の空気」を知る、これこそが歴史の勉強なんです。

#### 旅の記録ではなく文学

次に重要なことは『おくのほそ道』が芭蕉と曾良の旅の記録ではなく、芭蕉が練りに練つた文学

作品であるということです。『おくのほそ道』という、芭蕉と曾良が東日本をぐるっと回つた旅行記であると思つている方が大半なのではないかと思うのですが、これが大間違い。旅行記ではありません。芭蕉の明確な文学意識に従つて作り上げた文学作品なのです。つまりフィクションです。『おくのほそ道』は文学作品であるという風に割り切つて読んだほうが『おくのほそ道』がよくわかる。

もちろん自分たちの旅の体験を題材にしていますが、そのとおりに書いていない。なぜそれがわかるかという、芭蕉のお供の曾良が、何から何まで細かくメモしている。山中温泉で別れるまで、ずっと芭蕉と自分の動向を記録しつづけた。これが『曾良日記』です。これと『おくのほそ道』を合せてみると、『おくのほそ道』には『曾良日記』にないことが書かれていたり、実際にあったことが書かれてなかったりする。あるいは、あったことを少し変えて書いているところもあります。

これを旅行記だと勘違いしていると、『おくのほそ道』を旅する」などという旅行会社の宣伝にまんまとのせられて巡ったりする人がいるのですが、『おくのほそ道』に書いてあるとおりににはゆかない。実際行くと、添乗員が「ここはちよっと違います」と説明するので「何だ」と思う人もいるでしょうが、『おくのほそ道』にはありもしなかったことを書いているところもあります。人気の高い市振のくだりです。そこを読んでいただきますか。ここは艶っぽい場面ですから艶やかに読んでください。(笑)

今日は親知らず・子知らず・犬戻り・駒返しなどいふ北国一の難所を越えて疲れはべれば、枕引き寄せて寝たるに、一間隔てて面の方に、若き女の声、ふたりばかりと聞こゆ、年老いたる男の声も交じりて物語するを聞けば、越後の国新潟といふ所の遊女なりし。伊勢に参宮するとて、この関まで男の送りて、明日は古里に返す文したため、はかなき言伝

などしやるなり。白波の寄する汀に身をはぶらかし、海士のこの世をあさましう下りて、定めなき契り、日々の業因いかにつたなしと、物いふを聞く寝入りて、朝旅立つに、われわれに向かひて、「行方知らぬ旅路の憂き、あまりおぼつかなく悲しくはべれば、見え隠れにも御跡を慕ひはべらん。衣の上の御情けに大慈の恵みを垂れて、結縁せさせたまへ」と涙を落とす。不便のことには思ひはべれども、「われわれは所々にてとどまるかた多し。ただ人の行くにまかせて行くべし。神明の加護、必ず恙なかるべし」といひ捨てて出でつ、あはれさしばらくやまざりけらし。

一つ家に遊女も寝たり萩と月

曾良に語れば、書きとどめはべる。

「曾良に語れば、書きとどめはべる」とありますが、『曾良日記』には何も書いてありません。曾良ほどの忠実な弟子が芭蕉にいわれたのに書き留めなかったとは考えにくいので、無かったこと

を芭蕉が書いているということでしょう。では、芭蕉はなぜ無かったことを書いたのかというと、『おくのほそ道』は文学ですから、ここには遊女の誘いを断る話が必要だと感じたからです。これが『おくのほそ道』がフィクションであるということなのです。今まで『おくのほそ道』が紀行文だと思っていた方は、これは芭蕉が書いた文学、フィクションであることを心に刻んで読んでください。

#### 時間の猛威にどう耐えて生きるか

『おくのほそ道』が単なる紀行文ではなく芭蕉の文学であるとなると、明確な主題と構成があるはずです。

『おくのほそ道』の主題は最初に書いてありません。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

まず「月日は百代の過客にして」とありますが、月日は時間、行き交う年も時間、つまり、時間は永遠の旅人であるということです。この時間が、『おくのほそ道』のテーマです。これからはじまる話は時間をめぐる話ですよと最初に宣言しているのです。

私たちは生きていると時間につねにさらされています。時間の中で人は生まれ、時間によって成長し、時間の中で一人死ぬ。時間とともに人と出会ったり別れたりする。人間の生活は時間の猛威にさらされている。濁流のような時間の猛威の中で人間はどう生きていくか、これが『おくのほそ道』全体のテーマです。

帰って鏡をご覧ください。自分の顔を見ると若いころの顔とは明らかに変わっている。自分の肉体が時間によって変わってしまった。これが人間にいちばん身近なところで起きている時間の現象です。私は若いままでもいい、若さを失いたくないと思っている人がたくさんいますが、これは無理な話です。若いままでもいいと思うと、逆にど

んどん押し流されます。もはや若さは手放さざるを得ないと覚悟した方がいいですね。

ではこのテーマに沿って『おくのほそ道』はど  
う構成されているかが次の話です。

地図を思い浮かべてください。深川を発つて大垣で終わる長旅ですが、この「奥羽長途の行脚」をまず前半と後半、太平洋側と日本海側の二つに分ける。境目が尿前の関です。平泉は前半、太平洋側の旅の最後に位置しています。

その前半と後半をさらにそれぞれ二つに分ける。前半は白河の関、後半は市振の関で二つに分ける。『おくのほそ道』はこの四部で構成されています。

この四部構成は『おくのほそ道』の本文に目を近づけて丹念に読んでみるだけでは見えません。森の中で樹木に目を凝らして見ているようなものです。逆に『おくのほそ道』全体を遠くから俯瞰しながら読むと、四部構成であることと各部のテーマが少しずつ見えてきます。

太平洋側は白河の関で第一部と第二部に分かれ

ます。第一部（白河の関まで）のテーマは長い旅の安全祈願です。ここではお寺に参ったり滝にこもったりする話がつづきます。日光の裏見の滝では、

暫時は滝に籠るや夏の初

という句を残しています。

次の第二部（白河の関から平泉まで）は歌枕が次々に出てきます。歌枕は王朝・中世の文化遺産ですが、みちのく（白河の関以北の太平洋側）にたくさんある。そこで芭蕉は歌枕を訪ねようと思いついて『おくのほそ道』の旅に出る。ところが訪ねてみると、数々の名高い歌枕が壊されたり、なくなったりした惨状を目の当たりにすることになります。

「しのぶもぢぢり石」は旅人が畑を荒らすので村人たちが崖から下に落して、ひっくり返ってしまっていた。第二部ではこのような歌枕の惨状に次々出会う。

「末の松山」は永遠の愛の誓いの歌枕です。それが今では墓原になっている。このくだりは芭蕉の冷やかな恋愛観を物語っているのではないでしょう。

このように歌枕の大半が変わり果てていた。ただその中にいくつか昔のまま残っているのがあった。その一つが「壺の碑」であり、もう一つが平泉なのです。

壺の碑が出てくるのは多賀城のくだりです。昔のまま残っていると思つた壺の碑に芭蕉は感動して「千歳の記念」であると書いています。千年後への文化遺産というのです。芭蕉は大いに感激しているのですが、芭蕉がこのとき見たのは壺の碑ではなくて多賀城碑という別の石碑でした。昔のまま残っている芭蕉が感激した壺の碑も、じつは本物ではなかったという皮肉なオチがついています。芭蕉は気づきませんでした。芭蕉が嘆いた時間の猛威は壺の碑もほかの歌枕同様押し流してしまっていたということになります。

壺の碑はこのように間違いましたが、ほんとう

に「千歳の記念」として残っていたのが中尊寺の光堂（金色堂）だったのです。

あらためて光堂のくだりを読んでください。

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。経堂は三将の像を残し、光堂は三代の棺を納め、三尊の仏を安置す。七宝散り失せて、珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の叢となるべきを、四面新たに囲みて、叢を覆ひて風雨を凌ぎ、しばらく千歳の記念とはなれり。

五月雨の降り残してや光堂

歌枕のほとんどが時間の猛威によって破壊されたり行方知れずになったりしているのに、光堂だけは鞆堂に守られて残っていると芭蕉は感動しているのです。「五月雨の降り残してや光堂」の「五月雨」は降りつづく五月雨であると同時にここでは何よりも時間の比喩です。

平泉でも時間の猛威がすべてを奪い、館も寺も

跡形なく消し去ったのに光堂だけが残っている。芭蕉はここで時間とともにすべてが流れ去るのではなく、もしかすると流れ去らないものもあるのではないかというかすかな希望を抱くことができただけです。芭蕉にとつて光堂は時間の猛威に対する希望でありまさに光だったということです。そこをしっかりと読みとっていたのだと思います。

### その後の芭蕉

『おくのほそ道』のその後、第三部と第四部についても少し述べてみようと思います。平泉から尿前の関を過ぎて日本海側の第三部、第四部入ります。第三部（尿前の関から越後路）のテーマは宇宙の旅です。ここでは、太陽や月や星が次々と出てくる。月山では、

#### 雲の峰いくつ崩れて月の山

この「いくつ崩れて」が時間の猛威の象徴であ

るのがおわかりかと思えます。それにもかかわらず月は残っている。光堂ここでは月の山に姿を変えて現れます。

酒田の港では海に沈む夕日を眺めて、

暑き日を海にいらたり最上川

越後路では星の句が二つあります。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡に横たふ天の河

どちらも七夕、星の恋の句です。「荒海や」の句は「佐渡に横たふ」とありますが、出雲崎あたりの海岸から天の川は佐渡の上に横たわっては見えません。天の川が佐渡の上に横たわっているこの句の絵もあります。じっさいには後ろから佐渡へ向かって天の川が流れています。それを織姫と彦星という二つの星が佐渡を枕にして一緒に寝ていると見立てているのです。二人の若い男女

の白い体をほのぼのと夜空に思い浮かべている。エロティックな句です。

この濃密な星の恋の句があつて、次が第四部（市振の関から大垣）の市振のくだりなのです。

ここで星の恋を人間の浮世の恋に転換することによって芭蕉は第三部の宇宙の旅から第四部の人間たちの浮世へ帰ってくる。市振のくだりに遊女との別れを芭蕉が書いたのは、ここが第三部から第四部への転換点でこの話が要ると思つたからです。

第四部のテーマは浮世帰ります。ここではさまざまな別れが描かれます。まず金沢では会いたいと思つていた一笑という俳人が、少し前に亡くなつていたという「会う前の死に別れ」、山中温泉ではお供の曾良がお腹を壊して先に旅立つていくという「生き別れ」が描かれます。

このような人と人との別れ、これもやはり時間の猛威が人間界（浮世）に及ぼす作用なのです。

そしていよいよ『おくのほそ道』の旅の最後の太垣では駆けつけた人々と別れて舟で伊勢へ旅立ちます。

#### 蛤はまぐりのふたみにわかれ行く秋ぞ

この句の軽々とした感じは、宇宙を旅してきた人が人間界を天上の高みから俯瞰する、そうすることによつてはじめてたどり着いた「かるみ」の境地です。『おくのほそ道』の中で「かるみ」という言葉は一度も出てきませんが、時間の猛威に耐えながら「かるみ」にたどり着くまでの芭蕉の心の遍歴を描いたのが『おくのほそ道』なのです。今日のご清聴ありがとうございます。

プロフィール

はせがわかい

昭和29年 熊本生。

句集『虚空』（読売文学賞）、『松島』、

『太陽の門』など

著書 『俳句の宇宙』（サントリイ学芸賞）

『和の思想』（中公新書）

『古池に蛙は飛びこんだか』

『芭蕉の風雅』

『俳句的生活』

『奥の細道をよむ』（岩波新書）

朝日俳壇選者／読売新聞に詩歌コラム「四季」

連載中

・村ぢゆうの畦あらはるる雪解かな

・合戦の跡を寺とし春田かな

・降る雪や奪はれても奪はれても福島

## 法華経一日頓写経会

六月十二日（第二日曜日）午前十時より

六万九千余字よりなる法華経八巻に開経と結経を加えた一部十巻を一日の内に書写しあげる写経会。

奥州藤原氏二代基衡公が、亡父清衡公を供養するために行ったという善業に倣い、平成九年より毎年開催しております。



現在も続く写経風景

(6月第2日曜日／法華経一日頓写経会)

詳細は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。  
☎〇一九一（四六）二二二一

## 「文化の泉」

佐々木 邦世

今年、旧友からいただいた賀状には、コロナ災禍の一日も早い収束を願うばかりです、といった書き添えや、自粛、巣籠もり生活も長くなってこれまでの平凡な日常の有難さを思い記したものもありました。

折しも、新聞の読書欄に、これから世の中どうなっていくか考えたとき、頼れるのは「先人の遺した文字」と自らの思考とである（清水幾太郎）の寸言に触れて、あれこれ思い起こしたところです。

昭和二十二年、今からもう七十五年も前になります。此処、平泉は、当時まだ駅に降りる人も数えるほどで道のあちこちに水溜まりもある、東北の一村でした。ただ、学校の行き帰りにも高館や東稲山が目に入り、無量光院跡や、当時まだ遺跡が埋もれたままの田畦を遊び歩き、達谷の窟や中尊寺白山社の野外能舞台とか、

小中学生にもなにか「文化」の風を感じられるところでした。

駅前から、やや人家が続く唯一の町通りの一角に、「せとや」と称した瀬戸物屋さんがあつて、そこに、日本上代史の碩学、津田左右吉博士が東京から疎開して来て、居られました。

その津田博士が、中尊寺の本堂を会場に地元青年会の講演で、こう語っています。

文化とは、日常のわれわれの生活が文化である。自然界の状態に対し人間のすること、人間の生活が文化である。

文化といふものは、日常生活から離れた特別なものであつてはならない。知識を昂める、物ごとを考へる、芸術、すべて文化のはたらきである。精神の生活である。精神生活と物質的生活と別々にあるのではない。日常の衣食住の中に学問もあり、芸術もある。宗教もあり、或は政治もはたらく。

生活は人間のすることであり、自分みずからすることである。



北上川 衣川かつての遠景

昔のものが残っているといふことだけが誇りではない。それを新しく生かしてゆくところに真の誇りがある。

「平泉青年講習会講演概要」

日常生活が「文化」だと説かれている。なるほど文化は英語で言うところのカルチャー (culture)、その原義は耕作することあります。「こころを耕す」のが文化なのです。ただ筆筈に収めて大事に仕舞っておく、仏間や高いところに額に入れて飾っておく、あるいは国立劇場に行つて観るだけが文化ではないわけです。

それにしても、多くの人が腹をすかせていた戦後のあのころ、必ずしも十分教育をうけられた状況でなかった地方の青年たちに、「文化」を身近なものとしてその日その日の生活そのものにある、と語られているのです。

日常生活ですから、見たり聞いたり、食べたり話したり、歩いたり勘定したり、いろいろあるでしょう。

田起こしが済んで、地区の人たちとあれこれ雑談することもあるでしょう。

そう、「文化の基礎は、雑談である」と司馬遼太郎が書いてました。ただ、「雑談には閑と伎倆が要る」とも。この閑は、単に隙な時間ではなくて、慣らう、慣れる意に解されます。自分と異なった考えや嗜好にも、聴く耳をもって対話できるか、です。

文化とか、平和とか憲法などというところ、どうも自分の日々の事象から少し離れたところに聞き置いて、関心が無いわけではないが傍観していることが多かったような気がしませんか。

コロナが収束したらではなくて、今日も、耕し保持し、小学生も後期高齢者も汲めるものがあるでしょう。津田左右吉先生は、平泉小学校の校歌を作詞してくださった。「文化の泉 日毎くむ」「文化の波を迎えつつ 我等の学校 平泉」と大きな声で歌って、私たちは大きくなったのです。

(中尊寺仏教文化研究所長)



津田左右吉先生  
「五年の歳月を送りし平泉を去る」(昭和25年4月)

\*津田史学といわれますが、思想史が本領とされ、平泉に滞在されている間に世に送られた論説に「明治維新史の取扱ひについて」(『世界』)や「過去の生活をどう理解するか」(『思想』)、「現下の世相と日本人の態度」(『中央公論』)なども挙げられます。そして今、その明治維新についての論著が改めて読まれ、注目されているようです。



# 七宝莊嚴と金銀和光

菅原光聰

令和三年（二〇二一）は「平泉」が世界文化遺産に登録されて十周年にあたる年でした。

奥州藤原氏によって築かれた有形無形の文化は、藤原氏滅亡の後、八百年を超える時を経てその多くが失われました。そうした中で初代清衡公の遺された二つの遺産が現在まで中尊寺に伝えられています。「金色堂」と「紺紙金銀字交書一切経」です。

## （一）金色堂

松尾芭蕉は『おくのほそ道』で源義経、そして奥州藤原氏滅後五百年の金色堂を「七宝散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て」と表現しました。旧一関藩士・高平真藤の編んだ『平泉志』には「中壇の四隅にハ七宝莊嚴丹青の柱を立て柱毎に十二光仏を函し」と伝え、泉鏡花はみちのくの紀行で短編「七宝の柱」（新編泉鏡花集第十巻）

をもつて合成せり」と、多宝如来の塔も七宝によって荘嚴される様子が描かれています。また「諸仏滅度しおわりて、舍利を供養するものは、万億種の塔を建てて、金・銀および頗梨と、碑磔と碼碯と、玫瑰、瑠璃珠をもつて、清淨に広く嚴飾し、もろもろの塔を莊校し」と過去仏の法華説法を受けた衆生が七宝によって仏舍利塔を建立し仏道を成就することが説かれています。内容には多少の異同があるものの七宝の記載は多くの經典にみられるのです。（後掲表参照）

そして『無量寿経』に「その国土には七宝の諸樹、世界に周滿せり。金樹、銀樹、瑠璃樹、玻璃樹、珊瑚樹、碼碯樹、碑磔樹あり。あるいは二宝、三宝、乃至七宝、うたた共に合成せるあり。（中略）このもろもろの宝樹、行行あい値い、莖莖あい望み、枝枝あい準い、華華あい順い、実実あい当たり、栄色光耀として視るに勝うべからず。清風ときに発りて、五音の声を出だす。微妙の宮商、自然にあい和せり」とあるように樹々を形づくる七宝が互いに融和し、清風になびく七宝樹の木擦音は妙なる五声（宮・商・角・徵・羽の五つの音階）のハーモニーを奏するといわれています。

岩波書店を著しました。金色堂は「七宝莊嚴」の形容とともに人口に膾炙されてきたのです。

經典に説く「七宝」とは何か。『無量寿経』には「その仏の国土は自然の七寶、金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・碑磔・碼碯をもつて合成して地となせり」と記し「觀無量寿経」には「了々分明に極樂国の七宝莊嚴の宝地、宝池、宝樹行列し、諸天の宝帳その上に弥覆し、衆宝の羅網、虚空のなかに満つるを見る」とあります。『阿弥陀經』にも「極樂国土には七宝の池有り。（中略）上に樓閣有り。また金・銀・瑠璃・玻璃・碑磔・赤珠・瑪瑙をもつて、しかもこれを嚴飾せり。池の中に蓮華あり、大きき車輪のごとし。青色には青光あり、黄色には黄光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、微妙香潔なり」と記され、極樂国土が四色の蓮華とともに七宝によって荘嚴され、けがれなく香り立つ光景が説かれています。『妙法蓮華経』には「仏前に七宝の塔あり。高さ五百由旬（注：一由旬は十数キロメートル）、縦の広さ二百五十由旬なり。地より涌出して、空中に住ず。種種の宝物をもつて、これを莊校せり。（中略）そのもろもろの幡蓋は、金・銀・瑠璃・碑磔・碼碯・真珠・玫瑰の七宝

『阿弥陀經』に「彼の仏の光明無量にして十方の国を照らして障礙するところなし、この故に号づけて阿弥陀とせり。又舍利弗、彼の仏の寿命及びその人民、無量無辺阿僧祇劫なり、故に阿弥陀と名づく」とあるように阿弥陀仏の名は「無量光（アミターバ・限りない光）」と「無量寿（アミターユス・限りない寿命）」に由来します。奥州藤原氏三代秀衡公が建立した阿弥陀堂を無量光院と号したのもこのためです。素材の異なる七宝の融合によって成り立つ仏国土（環境、依報という）が、阿弥陀如来（仏菩薩、正報という）の無量光を受けて永遠絶妙に融和しているのです。様々な事象の違いや区別といったものは仏の智慧の光の中では、そのままに一つの浄土として融け合う、これを「依正不二」といいます。

阿弥陀浄土を表現した金色堂の壁や床はみちのく産の漆と金箔で荘嚴され、内陣の四天柱には金や銀を用いた蒔絵によって四十八体の菩薩像が図繪されています。また柱、須弥壇、長押は南洋産の夜光貝を用いた螺鈿細工で荘嚴されています。そしてその長押には緑青色の瑠璃石（ガラス玉）がはめ込まれ、長押の下には様々な色のガラス玉や金

表・『無量寿経』『阿弥陀経』『妙法蓮華経』に見られる七宝

七宝	無量寿経	阿弥陀経	妙法蓮華経	備考
金	○	○	○	
銀	○	○	○	
瑠璃	○	○	○	青色の珠
珊瑚	○	○	○	珊瑚の珠
琥珀	○		○	黄色の樹脂化石
砮磈	○	○	○	白色の二枚貝
瑪瑙・碼碯	○		○	縞模様石英結晶
明月	○			明るく発光する珠
真珠	○		○	貝から採れる白銀の珠
玻瓈・頗梨	○	○	○	水晶、ガラス
赤珠		○		明珠、赤色の珠
玫瑰			○	赤色の石
摩尼			○	如意宝珠

銅金具をつないだ瓔珞飾りが提げられています。高欄には紫檀材が用いられ、象牙がはめ込まれています。金・銀・銅・瑠璃（ガラス玉）・象牙・螺鈿・紫檀などの荘嚴は、いわば金色堂の七宝ともいえるのです。

金色堂を建立した清衡公は都の藤原家に連なる陸奥国の在庁官人・藤原経清公を父、みちのく奥六郡の俘囚長・安倍頼良（のち頼時と改名）の娘・有加一乃末陪を母として生まれました。その前半生は蝦夷と朝廷・国府軍との間で繰り広げられた前九年の戦い、後三年の戦いに翻弄されます。戦によって清衡公の中に流れる蝦夷の血と貴族の血が離反し、身が張り裂けるような辛苦を味わいました。

異なる材質、異なる光が阿弥陀如来の無量光を受けて永遠に調和する世界が經典に説かれる浄土の世界です。産地や性質の違い、多様な立場や考え方が受容され融和する世界、そのような清衡公の祈りが七宝荘嚴の浄土・金色堂に込められているように感じるので。

### (一) 紺紙金銀字交書一切経

清衡公は亡くなる二年前の天治三年（大治元・一一二八）

三月二十四日、中尊寺造営の集大成として「鎮護国家大伽藍」の落慶供養を厳修しました。

この伽藍の比定地とされる中尊寺境内「大池伽藍跡」では現在、平泉町教育委員会によって遺跡の全容解明に向けた発掘調査が続けられています。

「中尊寺建立 供養願文」に記された建造物や仏像はおしなべて失われていますが、唯一現存するものがあります。二階瓦葺経藏に奉納された「金銀泥一切経一部」、つまり国宝「紺紙金銀字交書一切経」です。

「一切経」とは経（仏の教え）・律（戒律）・論（教えに対する論説）を網羅した約五千三百巻に及ぶ仏教全書のことで「大蔵経」とも呼ばれます。国内外における金銀字写経の先行例はいくつか存在しますが、金泥、銀泥の交書経として作り上げられた一切経は現存する唯一無二の遺例です。この一切経奉納に込められた清衡公の願意はどのようなものだったのでしょうか。

古代中国、そして日本においても「金」は王権を表徴するもので、清衡公の金銀字交書一切経は金字の一切経から一步退いたかたちで王権との結縁と鎮護国家を担う王臣と

しての正当性を、海外情報も取り入れた斬新な荘嚴によって誇示したものとみられます。（劉海宇「中尊寺金銀字一切経と東アジアの王権」・吉川弘文館『平泉の仏教史』所収）

文化の創造と発信において威信材としての一側面は為政者の矜持として受け止めることができますが、ここでは「供養願文」の文言とその行間からこの経に込めた清衡公のより内的な動機について考えてみたいと思います。

「供養願文」によると、この一切経は「金書と銀字一行を挟んで光を交わし紺紙玉軸、衆宝を合して巻を成す。漆匣を以て部帙を安んじ、螺鈿を琢んで、以って題目を鏤む」と記されています。様々な素材を合わせて製作されている点は、金色堂の七宝荘嚴に通じるものがあります。落慶法要では千部の法華経を千名の僧で転読する「千僧供養」とともに、金銀字交書一切経五千余巻を五百三十名の僧侶（題名僧）がそれぞれ十軸ずつ分担して捧げ持ち、紐を開いて経題を唱える「一切経会」が厳修されたといえます。願文にはこれらの作善の趣旨は「偏に鎮護国家の奉為なり」とし、「一千五百余口の僧を延囑し、八万十二

の一切経を讃揚す。金銀和光し、弟子の中誠を照らす。仏經合力して、法皇の上寿に添わん」と述べられています。仏養によって、経文の「金」字と「銀」字が「和光」して「弟子（清衡公）の中誠」が照らされる。そして伽藍に安置された「仏」と経藏に奉納された「経」（＝仏の説いた「法」）が「合力」して「（白河）法皇の上寿」が叶い、「鎮護国家」が祈願されているのです。

出来うる限りの作善をもって「仏」「法」「僧」の三宝に帰依し、自らの「中誠」を明らめ、知天の君（為政者）である白河法皇の長寿を祈っているのです。この意味で「金」は王権を、「銀」は臣民を象徴しているといえるかも知れません。

一方で清衡公はこの願文において自らの持つもう一つの側面から祈りを捧げています。つまり「東夷の遠酋・俘囚の上頭」としての「官軍」「夷虜（蝦夷）」に対する「冤霊」供養です。清衡公にとつて「金」「銀」の表すもう一つの意味は自らの身体の中に流れる「官軍」と「夷虜」の血、つまり父・藤原経清公と母・有加一乃末陪から受け継

いだ血をあらわしていたのではないのでしょうか。

国域の伸張と安寧を目指す朝廷と、祖地に住みながら時に王地を押し領し謀反をおこす者と目されたみちのく人、あい容れない血・イデオロギーが豊かな大地をめぐって争いを続けました。二つの異なる血が融和するがごとく金銀が和光し、怨親平等の心を照らすことが清衡公の「中誠」であり、そこに達するための作善が金銀交書の写経業だったのかもしれない。「官軍」「夷虜」「毛・羽・鱗・介」（水陸に棲む動物たち）、「胎卵湿化」（生まれかたの異なるすべての生物）が、その光のままに和してゆく。「蛮夷」とさげすまれてきた者たちであっても本来の善なる存在に帰る「界内の仏土」（迷いの世界の中にある浄土）に行きついで「諸仏摩頂」（諸仏が衆生の頭を撫でること）に預かることのできる世界。この二つの光にそいった清衡公の願いが込められていると思えるのです。

昨今、「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会をめざして「SDGs（持続可能な開発目標）」が脚光を浴びています。清衡公の願いは現代の私たちの希

求する未来へ通じていると感じます。一方で九百年前に清衡公がその人生の実体験に基づいてたどり着いた宗教的願いの底流には、抗うことのできない幾多の理不尽や正義の物差しの前に散った「冤霊」に対する鎮魂の祈りがあることも忘れてはなりません。

来る令和六年（二〇二四）には金色堂建立九百年、令和八年（二〇二六）には中尊寺落慶供養九百年を迎えます。「七宝莊嚴」と「金銀和光」に込められた清衡公の祈りと願いに、より思いを深めてまいりたいと存じます。

（執事長）

# 東日本大震災から十年

菅野 澄 円

私は東日本大地震を経験していません。その時は、滋賀県大津市の天台宗務庁にいました。参加していた会議で、担当した調査結果を報告していた緊張でその揺れには全く気づきませんでした。

## 愛別離苦（四苦八苦）

会議に参加していた関東の住職二人と手分けして帰京の方法を模索しますが、東海道新幹線・高速バス・空路いずれも不通か満席でした。京都駅前でレンタカーを借りることができました。東京で返却する契約で借りるのですが、いたって普通に手続きできました。名神高速・東名高速ともに混雑はしていましたが今日中に東京まではたどり着けるかと思われました。しかし、静岡市に差し掛かると渋滞が発生。清水市は平地が狭く、そこを国道一号線、東名高速、東海道線、東海道新幹線が並行して通っています。そ

れが津波警報のため全て通行止め。清水港は立入禁止といった状況です。大型トレーラーの多くは諦めて車列をつくっています。それでも時間指定のある車両は、高速を降りて山間部の道路を目指します。我々もノコノコとその車列に続きました。カーナビが抜け道として表示するその道は、とても大型トレーラーがすれ違えるような道ではありません。「箱根の山は天下の険」の意味を思い知ることになります。この時、山中で見た建設途中の巨大な橋脚が第二東名高速のそれであることを知るのはずっと後のことです。文明の終わりを思わせるオブジェのようで不気味でした。

暁とともに到着した東京都内は、信号は機能しておらず、それでも車両も人もいないため渋滞もないという不思議な光景でした（十年の間に二度も閑散とした東京を体験するのはこの時は想像だにしませんでした）。東京滞在中は、繰り返し放送される津波の映像と、刻一刻と危機感が増す福島第一原発の速報を見ることがとなりました。災害用伝言板で東京に能の稽古に来ていて帰宅難民となった五大さんと連絡が取れました。五大さんは数時間避難所にもいたそ

うです。私と五大さんは親戚の自動車を借りて平泉まで戻ることとしました。親戚の車は運悪くガス欠寸前・バッテリー切れの状態で諦めかけていると、トランクの底から三年前に亡くなった叔父の工具を発見。近くの量販店から買ってきたバッテリーと交換中に妻と一瞬携帯が通じ、その後二カ月の息子と家族の無事だけは確認できました。叔父が見守ってくれていたのだと思います。当然東北自動車道は通行止め、国道県道でも何処が通行止めか分からず、まだ三月初旬ですから降雪の可能性もある中を進みました。首都圏では緊急車両優先という理由でガソリンの補給が受けられません。埼玉県・栃木県境でおそろえるスタンドに入ると「はい！レギュラー満タン！」、計算上、平泉までの燃料は確保できました。福島市内では謎の路上駐車集団に出くわしました。それが浜通り地区から原発事故の見えない脅威から避難してきた人達であったことを知るの

には、明朝のガソリン補給を待つ車列だけが残り人影はありません。あまりにも真つ暗で一関市内に入ったことすら分からず、まだ見知らぬ街を運転していると思ひ込んでいました。こうして、六十時間千キロの旅の末、十四日未明、中尊寺にたどり着いたのです。妻は、「赤ちゃんが寝てるから」と、会話もそこそこに、仮眠をとりました。

## 求不得苦（四苦八苦）

はずつと後のことです。停電の地域がほとんどのこの時期に、国道沿いでただ一軒営業していたラーメンチェーン店。「材料のある間は営業します。みんなで頑張りましょう！」と張り紙がしてあったと記憶しています。暗闇の仙台市内

中尊寺はというと、幸いにも文化財への影響は最小限でした。ただし、石塔のいくつかは倒れ、本堂の土壁はほとんど落ちていました。津波の被害のあった沿岸地域へ、何か手をさしのべようとしても、物流は止まっています、生活必需品ほど品不足であり、大量にそれを買付け



と張り紙がしてあったと記憶しています。暗闇の仙台市内

ることはできません。なによ

りもガソリンが入手困難で移動もままなりません。僧侶も職員も、境内の後片付けをするほか無い状態です。ようやくミニバンに中尊寺備蓄のトイレットペーパー、駄菓子屋で購入した子供達の気が紛れそうな品物などを積み込み、陸前高田市へ行くことができたのは、三月二十一日のことです。地元土地勘として「まだ山間部」と思えるところから川を逆流した津波による被害があらわれ、同行した僧侶とともに言葉を失いました。最初に訪れた避難所では焚き火で暖をとっていた方が、「中尊寺からですか？いやあ、ありがとうございます」と、心配と不便の中にいるはずなのに、感謝の微笑みをかえしてくれます。それがかえって私達の胸を苦しめました。

それからは、全国の天台宗寺院・支援者の皆様から中尊寺に届けられる物資を、できるだけ運搬しました。当時、被災地に宅配便等で物資を送ることはできず、公共の窓口も対応が追いつかない状態が報道され、自然と中尊寺宛てに支援物資が届くことが増えていきました。時には十六トンの大型トレーラーが本堂表門に横付けされることもありました。百畳の大広間で職員総出で品物を仕分けし、各避

#### 正見 正思 正語（八正道）

支援物資の搬送とともに、避難所の方々を内陸にお連れし、温泉に入ってもらおう活動も行いました。送迎バスから降りる方々は焚き火の匂いがします。入浴し中尊寺の僧侶と話しをしてもらって、帰りには石けんの香りとともに乗り込みます。心なしか少し表情が軽くなった方が目立ちます。

ボランティアの受け入れが始まってからは、交代で、沿岸の市町村に向かいました。中尊寺の僧侶だけでなく全国から駆けつけたボランティアは、「困っていることは何でも手伝いたい！」という思いであふれています。ある時、



ボランティアに対して下さつてい  
た地域の区長さん  
らしき方が「今日  
はこのくらいで勘  
弁して下さい」と  
午前中で作業を切  
り上げたことがあ

難所の要望に出来るだけ沿えるように中尊寺の車両に積んでいきます。避難所で目にした自衛隊装甲車両の近くで子供達が遊んでいる様子は忘れられません。遠く中東の紛争地帯の報道写真のようでも、これは紛れもなく東北の漁港なのです。



災害派遣の自衛隊と子供たち

りました。この数カ月、心も身体も休まることはなかったでしょうに、そんなことを察することもできませんでした。別の街では排水に困っている側溝の蓋を開けることができず「こんなこともできないの？」とガツカリされてしまいました。比較的軽微な被害地区はボランティア派遣も後回しにされ、やつと来た私達が思いの外頼りなかつたというのが事実でしょう。道路のアスファルトが根こそぎ捲れ上がって、集落の入口を塞いでいることもありました。午前二時間・午後二時間奮闘し、「あと少し」というところでも、時間になれば撤収しなければなりません。翌日同じ場所へ行きたくとも、ボランティアセンターの指示を無視して行く訳にもいきません。使命感・達成感・焦燥感……。複雑な感情で心が乱されます。

各ボランティアセンターには、数日間テントに滞在しながら作業を続ける方も多く見られました。達成感や充足感もあるのでしょうか、まるでキャンプや合宿のような賑やかさすらあります。表面上とは裏腹に、彼らの心の中にも複雑な感情があるのだと思いました。

六月に平泉が世界文化遺産に登録されると、政府の復興

支援策・経済対策とも相まって、中尊寺境内にも沢山の参拝者が来山されるようになり、ボランティアに行く機会は減っていききました。

### 念念従心起（延命十句観音経）



中尊寺に三陸郷土芸能をお呼びして、参拝者の皆さんの前で演じていただこうという試みは、平成二十三年秋から始まりました。震災からわずか半年で避難所や仮設住宅もバラバラで練習もままならないのも実態です。装束や道具、或いは所属する神社そのものが流されてしまった団体も少なくありません。このようなことをお

願いして良いものか悩みながら各団体に夏頃から連絡をとりました。演じた方々が望んでいたのは、全国の方々にお礼を言う機会でした。それに虎舞の皆さんも、さんさ踊りの皆さんも本当に元気で、その力強い舞は参詣の皆さんにも充分伝わっていました。岩手・宮城沿岸の郷土芸能を令和元年まで毎年奉演いただきました。

陸前高田市の小友地区は、震災直後から慰問活動やボランティア活動へ行く度、広田湾に向かって回向をしていた場所でした。平成二十四年に有縁の方からのご寄進を受け地藏尊を安置。二十七年には東屋も整備され、今でも毎月十一日には一山金剛院を中心に、地元の方々も集って回向を続けています。

平成二十九年三月十一日、天台宗の東日本大震災七回



忌法要が勤修され、中尊寺本坊の一角に慰霊碑が建立されました。基壇の下には東北各県の沿岸被災地の小石が納められています。

### 念念不離心（延命十句観音経）

当時、ボランティアとして熱心に活動されていた方がお亡くなりになったとSNS伝いに知ることもありました。また、仮設住宅での写経活動の手伝いのため、私の車に同乗し喜んでいた青年と、偶然コンビニの駐車場で会うことがありました。立派なドイツ車に乗っていました。境内でさんさを踊ったことを喜んでいた少女は、結婚し、お子さんを授かりました。そのお子さんにもいつか中尊寺でさんさを踊っていただきたいです。

復興五輪と位置づけられた東京五輪・パラリンピックがコロナ禍の中、開催されました。沿岸各市の庁舎移転も進み、新しい防潮堤も完成に近づいています。令和三年十二月には三陸沿岸道路が全線開通しました。

被災地にお住まいの方、内陸へ避難された方にとってこの十年のご苦労はいかばかりかと存じます。私が見聞し体験

したことなど、その中の小さな点に過ぎませんが、点と点を繋ぎ線に、線を繋いで面に、そして立体的に後世へ伝えることができれば、いつかやって来る同規模の災害の時、被害を、犠牲者を最小限にすることができると信じたいです。

あの日、生後二カ月だった息子も、五年生となり陸前高田へ校外学習に行きました。奇跡の一本松について理解はあやふやなようですが、考えるきっかけにはなったようです。亡くなられた瀬戸内寂聴さん（大正十一年生）が、まるで見たかのように関東大震災（大正十二年）を語られるのを思い出すと、東日本大震災の年に生まれた子には、私の体験をもう少し伝えるべきなのかもしれません。

息子「震災の時、陸前高田の一本松を沢山の人が守ろうとしたけど枯れてしまったんだって」

父「そうだね。じゃあ、どうして人々が一本松を大事に思っただのかわかる？」  
息子「それはきつと…」

# 世界遺産登録

## 十年を振り返って

島原 弘 征

はじめに

令和三年、平泉は世界遺産登録十周年を迎えました。未曾有のコロナ禍のため、十周年記念行事は軒並み中止や縮小を余儀なくされた年でもありました。現在、私は平泉町世界遺産推進室に在籍しています。私を感じた登録からの十年、特に文化財や世界遺産にかかわる部分について振り返ってみたいと思います。

世界遺産登録はゴールではなく  
本当にスタートだった

世界遺産登録後によく言われたのが、「登録は

ゴールではなくスタート」というフレーズでした。このことは、平泉に限らず、近年世界遺産登録された地域でもよく言われている話なので、ご存じの方もいらっしゃると思います。

当時の私は、イコモス勧告から世界遺産委員会の決議までの間において柳之御所遺跡が除外され、骨寺村荘園遺跡をはじめとする拡張登録を目指す資産があったこともあり、喜びと同時に「スタートに違いない」と受け止めていました。しかし、時間の経過とともに拡張だけではなく、①登録資産の修復・整備の開始、②名勝おくのほそ道の風景地の名勝指定、③世界遺産の保存管理等が動き始め、単なるスタートではなくスタートラッシュとなったことを痛感することになりました。

### 1、登録資産の修復・整備

登録五資産のうち、中尊寺金色堂や毛越寺庭園、観自在王院跡は昭和の整備・修理から半世紀近くが経過し、経年による傷みが発生し、再整備や修理事業が始まりました。具体的には、毛越寺庭園

において東日本大震災による立石被災を契機とした境内の再整備事業の開始、無量光院跡では整備事業が始まりました。また、観自在王院跡も再整備に向けた調査を再開しました。

### (1) 中尊寺金色堂

中尊寺金色堂では、昭和の修理以降に生じた経年による漆箔の亀裂や剥落に対して必要最小限度の補修を令和二年度に行いました。

必要最小限度とした理由として、現在の塗膜面下に古い塗膜面が残されていることが挙げられます。古い塗膜面は建立時やこれまで行われてきた金色堂修理の貴重な証拠であり、修理範囲を広範にしてしまった場合、この大事な証拠が失われてしまうことから、この貴重な情報を後世に伝えるため、亀裂部分を中心とした最小限度の範囲に収めることになりました。また、この判断には、建物本体について喫緊の修理を要する状況ではないこと、覆堂内の温湿度環境も安定していることから、本格的な解体修理を必要としなかったことも



金色堂の修復作業（令和2年度）

後押ししています。

修理の際には、古い塗膜面や金箔純度についての科学的な調査を実施し、その成果を蓄積することも併せて実施されました。

金色堂の修理事業は、直面した課題であった漆箔の亀裂への対応を中心に、まさに必要最小限度の修理に留めると同時に、修理内容の記録、科学的分析結果の蓄積等、次世代に繋げるための作業が行われたと言えます。

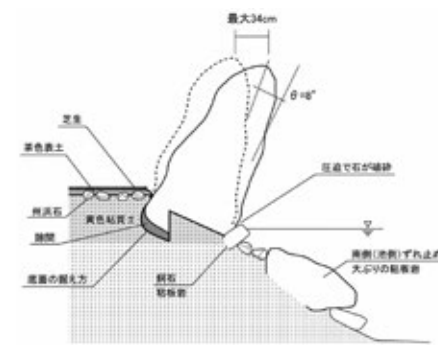
なお、事業内容の詳細については、『関山』二十六号に、菅原光聴執事長の「国宝中尊寺金色堂保存修理竣工」と、この二十七号掲載の三浦章興執事「令和二年の金色堂修理工事について」をご覧ください。

## (2) 毛越寺（立石と庭園の再整備）

毛越寺の清泉が池南東部に位置する池中立石は高さ二・五メートル、重さ推定四トンの蛇紋岩で、その姿は池に立体的なアクセントを加えている象徴的な石です。この立石が、東日本大震災の最大

余震（平成二十三年四月七日）で傾きました。まだ余震が続いている時期であったことから、倒壊防止のため応急処置で支柱を設置し、特別名勝毛越寺庭園整備指導委員会の指導を得て、内容確認調査を実施し、調査結果を踏まえ復旧方法の検討を行い、修理が行われました。

調査の結果、立石本体の下に敷かれていた石（銅石）が割れていたため、立石が傾いたことが分かりました（左図参照）。復旧に際しては、割れた



毛越寺立石模式図

石を除去し新たに粘土と銅石を補充して、立石本体を平成二年の位置に戻しました。今回補充した銅石には、十文字の刻みをつけて後世の人々が分かるようにしました。

平成初期の整備から四半世紀近くが経過したこともあり、立石の復旧を契機に庭園を中心とした再整備事業が始まりました。庭園の現状を確認し、修復が必要な箇所については再整備を行うための調査が開始され、現在庭園内にある樹木関係の整備が行われています。庭園を構成する樹木を含めた庭園内の風景をどう残していくのか、樹木の状態・場所に応じて剪定・伐採等の必要な措置が行われました。その判断には樹木医さんの診断と庭師さんの経験を加味した基準を作成し、実施しました。実際の診断には、樹木を傷めることなく樹木内部の状態を診断できる非破壊診断装置を用いて、科学的な知見と経験を加味した診断を行っていただきました。生きている庭園を次世代にどう遺していくか、その検討過程を後世に遺すため、来年度に、これまで行った経過や判断基準等の内容を報告書として取りまとめる予定となっています。

今後は庭園の現状確認の結果をもとに庭園や基壇の修復を中心とした再整備が行われる予定となっています。



毛越寺立石修復の様子（平成23年9月16日）



### (3) 無量光院跡

無量光院跡は世界遺産登録後、大きく景観が変化した資産です。世界遺産登録以前から史跡整備に向けた調査が、平成十四年より行われており、北小島や舞台遺構、池の形状や意匠など多くの成果が得られました。

『吾妻鏡』には「院内の荘厳はことごとく宇治の平等院を模した」ことが記されています。これまでの発掘調査によって本堂(阿弥陀堂)母屋の規模、北小島の発見、池の形が似ていること等、平等院との類似性が多く認められ、『吾妻鏡』の記述を裏付けています。一方で本堂の基壇構造が異なることや、阿弥陀堂前の埴敷の有無、本堂に尾廊が無いことや、翼廊の柱間数が一間分多いこと、東島の存在など相違性も多くあることから、類似性と相違性の双方が際だっていることが分かりました。

無量光院跡の整備は、院内を訪れた方々が無量光院跡を分かりやすく理解していただけるよう、価値を可視化(見える化)することを意識しています。具体的には、かつて水田や宅地であった園



整備が進む無量光院跡 (令和2年撮影)

池部分を整備し、訪れた方々が当時の風景を体験できることを目的としており、整備が進むにつれて徐々にではありますが当時の庭園空間に戻りつつあります。

また、発掘体験や「埴敷」のワークショップ等とおして子ども達が無量光院跡との繋がるきっかけづくりを意識しました。

「埴敷」は無量光院跡本堂前に、敷かれていたレンガ状の焼きものです。四十七センチ四方の大きさで、色はグレー・茶・赤茶色でした。整備では同じ大きさで同系色のレプリカを三九二枚作成し、裏側には町内の小学校四年生、中学校三年生が書いたメッセージを貼り設置しました(『広報ひらいずみ』二〇二〇年五月号に当時の写真を掲載しています)。

ワークショップを通して子ども達が平泉の文化遺産に関心を持つきっかけになればと思います。

## 2、名勝おくのほそ道の風景地

名勝おくのほそ道の風景地は、松尾芭蕉が記し



無量光院跡の埴敷 (令和元年度整備)

た紀行文『おくのほそ道』に記された土地のうち、当時の景観を残す名勝地について、芭蕉の風景感を表す一連の景観として保護するため平成二十六年三月に「金鶏山」と「高館」を含む十三箇所が指定されました。複数回の追加を経て、平成二十七年三月に「さくら山」が指定され、現在全国で二十六箇所が指定されています。

現在の世界遺産の構成資産は十二世紀当時の建造物や浄土庭園で構成されていますが、平泉文化はそれだけでなく、仏教美術や文学を含めた複合的・重層的なものであり、後世の文人たちを引き付けた歴史性も大事なものです。

いみじくも、登録時の世界遺産委員会の決議文において「平泉の大半は、政治・行政上の地位を失った一八八九年に滅んだ。それは、平泉のめざましい繁栄と顕著な富を表すと同時に、その急速で劇的な没落を示すものでもあり、多くの詩歌を喚起する素材となった。一六八九年に俳人の松尾芭蕉は、『三代の栄耀一睡のうちにして…』と詠った」（『月刊文化財』二〇一二年一月号）とあり、『お



名勝 おくのほそ道の風景地（さくら山）

くのほそ道』の世界観は、登録時から世界遺産に結び付き、補完するものであることは明らかであり、世界遺産を考える上でも名勝としての指定は大きいと思っています。

### 3、保存活用の話

世界遺産登録後、推薦書と同時進行で作られた世界遺産の「包括的保存管理計画」や「来訪者管理戦略」の運用が始まりました。実際の所、後者については、平泉は多くの観光客が訪れる観光地であることも幸いし、他の世界遺産より影響は少なかったと思われます。ただし、前者については遺産影響評価（HIA）の実施などこれまでの文化財保護行政に世界遺産側のチェックが加わり、世界遺産上の保護の考え方と日本の文化財保護のギャップをどう埋めていき、どう運用していくのかという課題に向き合った時間でもありました。大きな課題ではありますが、資産の保護と活用を持続可能な視点で両立させることを考える必要があるのではないかと思っています。

おわりに

世界遺産とくに資産（文化財）の視点から、この十年で変化したことを中心に触れてみました。各資産で何らかの変化があり、それが現在進行形で進んでいるのを感じていただければ幸いです。文化財の保存と活用は車の両輪に例えられます。保存が大前提であるのは当然ですが、活用を図り保存の重要性を訴えることも必要です。今一度、持続可能な保存と活用の調和を図りつつ、後世へ安定的に繋げるため、子ども達とのかかわり方を含めた視点が求められているかもしれない。幸い平泉町では「平泉学」として、幼年期から系統的に平泉文化を含めた学習が行われています。学習の中で更に文化財を使って触れてもらえる取り組みを含め考えていければと思っています。

しまはら ひろゆき

平泉町世界遺産推進室室長補佐

## 令和二年の

### 金色堂修理工事ついて〈報告〉

三浦 章 興

令和二年度の国庫補助事業として、金色堂の漆箔修理事業が行われた。

今回の工事は金色堂内に施された漆箔の損傷箇所の修復が主であり、本格的に修復の手が加えられたのは「昭和の大修理」からおよそ半世紀ぶりのことであった。この五十年経過の中で、平成二十年には岩手・宮城内陸地震が発生し、そして平成二十三年の東日本大震災では、その強い揺れによって金色堂も徐々に木部の接合部を中心に漆箔の亀裂、破損、剥離等が目立つようになってきていた。

また、漆箔の状態もさることながら、今後の金色堂のために現在の建物を取り巻く環境および建物の状態を調査した上で、保存管理の方針策定を行うことを目的として、「国宝中尊寺金色堂保存環境調査専門委員会」（以下 調査委員会）が平成三十年に立ち上げられ、これまでの調査結果

等を踏まえながら、新たな調査検討を行った。

調査委員会は四回にわたって実施された。翌年三月には検討結果をまとめた報告書が刊行されている。

調査委員会の答申では、金色堂の漆箔が修理を必要とする状態にあること、修理にあたっては現在の建物の状態を維持するよう最低限必要な修理に止めること、宗教空間としてその荘厳が相応しい状態とすることが述べられた。

これらの提言を踏まえつつ、中尊寺では上記の調査委員会委員に再度集まっていたが、名称を「国宝中尊寺金色堂修理委員会」（以下 修理委員会）とし、令和元年七月に第一回の会議を東京にて開催した。

学識経験者として修理委員会委員にご就任いただいた方々は、

濱島 正士（公益財団法人文化財建造物保存技術協会顧問）

窪寺 茂（建築裝飾技術史研究所長）

三浦 定俊（公益財団法人文化財虫菌害研究所理事長）

室瀬 和美（漆芸家 重要無形文化財保持者〈蒔絵〉）

以上の四名であり、中尊寺から執事長菅原光聰が加わり計五名として、委員長は濱島氏にお願いすることとした。

なお、会議の開催にあたっては文化庁、岩手県、平泉町より、各担当者にオブザーバーとして参加してもらい、それぞれの立場から意見をいただいた。

先ず、事前に文化財建造物保存技術協会（以下 文建協）によって作成された修復工事の様式書を基に、文建協および各地の文化財漆箔修理を手がけてきた株式会社小西美術工藝社（以下 小西美術）を交え、具体的な修理方針について検討された。

会議において議論の中心となったのは、文化財としてできるだけ現状を残し後世に悪影響が出ないような最小限の方策を取るべきであるという考えと、中尊寺金色堂という宗教空間の荘厳を完成後には今以上に高める修理でなくてはならないという考えの線引きであった。この二つの条件を両立し、工事期間の約半年で仕上げるには厳しい作業が求められることが想定された。

特にも、昭和の修理で施された箇所と、それ以前の時代に手が加えられた箇所と、仕様書ではこの二つの区分において修理方針が検討されている点について、委員それぞれから「昭和の修理であっても、金色堂の長い歴史の一部と

なるものであり、文化財を伝え遺す意味から、分けて考えるべきではない」との厳しい指摘を受けた。その上で「今回の修理がその歴史に一頁を記すこととなるという気概で取り組んで欲しい」旨要請された。

第二回の修理委員会は令和二年二月に中尊寺で開催。前回の会議において、修理作業の手板（約A3判サイズの板に金色堂と同様の漆箔を施した後にあえて亀裂を作り、その部分を今回の修理作業と同様の手法で修理したもの）を作製することが提案されており、当日は何通りかの修理方法を試した手板が用意され、会議前に金色堂の亀裂や剥離の現状を確認するとともに、スクリーン内に手板を持ち込み金色堂の壁面に当ててみることで、修理後のイメージを想定しながら検討された。

その後の会議では文化財を修理するにあたっての二つのあり方、建造物的修理方法と美術工芸的修理方法のどちらの立場で進めるかが議論となった。

委員から「金色堂をみてあらためて思ったことだが、昔の修理はほんとうに美術工芸的に、部分だけを直している。そのため時代による修理の差がはつきり伝わっている。そ

それが日本の過去の建造物修理、特に漆箔の手法だった。それが明治以降になって、建造物においては仕上がりが全体の美しさを追求する修理方法にシフトしてきている。金色堂については、もう一度以前の修理方法を考え直すべきではないか」との意見が出た。

亀裂の修理において、建造物的に行えば破損部分を覆い隠すように直線的に修復することとなる。見た目は良いが、作業の中で損傷していない部分をあえて除去せねばならないこともありうる。一方で、美術工芸的に行えば修理のために損傷していない部分に手を加えることはご法度とされているが、そのため周辺に影響を及ぼぬよう極力亀裂内部で作業を仕上げるため作業の難度は上がり、また修復跡がそのまま残ってしまうということとなる。

そこで金色堂内の修理箇所ごとに修理方針を変更し、かつ、あえて手を加える必要の無い場所を見極め、作業量のバランスを取ることで修理を円滑に進めることと決まった。

そのため、あらためて前述した二つの修理法で手板を作製し直して、それを基に、工事開始直前に再度修理委員会

合せでは、何とか収めますという強い意気込みが感じられ、安心してお任せすることとした。

さらに延期間間中、漆芸が専門の室瀬委員に手板の仕上がりを見ていただき、実際に修復作業を進めるにあたっての丁寧なご助言をいただき、実際に修復作業を進めるに当たって

そして第三回修理委員会において、工事開始に向け修理方針について最後の検討を行った。

金色堂の南と北の外壁面に存在する大きな亀裂については、亀裂に沿って周囲にできるだけ影響が出ないように、亀裂内部で修理が完結できるよう進めることとなった。

六月十五日、工事が開始。今回の工事期間中は支障が無い限り一般の参拝者が拝観する中での作業となるため、事前マスコミ公開の際も作業風景を報道していただき、説明板を設置しご理解いただくこととした。参拝者の方から貴重な文化財の修復風景を見ることができ良かったとの声をいただいた。

作業は小西美術の四人の職人によって進められた。特にもりーダーの岩本氏は、以前より中尊寺の文化財の漆工修理を手がけたことがあり、今回の工事には並々ならぬ職人

を開いて方針の最終決定を行うこととした。

会議のまとめとして委員長より「作業に時間をかけすぎで工程通りに進まなくとも、それだけ時間をかけて検討しながらやるだけの建物であり、時間と経費にとらわれずに、日本を代表する文化財として、木造建造物の中の漆芸はこういう修理をすべきなのだという、後世の手本になるような修理にできれば」という心強い言葉をいただいた。

四月になり、設計監理者として文建協と、施工業者として小西美術と正式に契約を結ぶこととなった。三月末には新しい手板の製作も順調に進んでいることを確認でき、五月の連休明けに第三回修理委員会を開催し、その後五月中旬には工事開始を予定していた。ところが、新型コロナウイルス感染症の蔓延のため、各所と相談の上、すべての作業を約一カ月延期することとした。また、金色堂および讃衡蔵の拝観は四月より五月末まで停止となった。

この延期が予想外の工期の遅れに発展しないか心配ではあったが（当初の予定では十一月末までに工事を終わらせるつもりであった。というのも冬季乾燥下での漆工作業は難しく、できるだけ避けたいと考えていた）、職人との打頼を寄せられる方であった。

ここで、具体的な作業内容と手順について、亀裂補修の例に説明する。

- A. はじめに、破損が進まぬよう、亀裂全体に生漆きうりしを塗りこませて固める。
  - B. 亀裂の中に麻布を詰め、その布に漆を含ませて固める。
  - C. こくそ（漆に木の粉を混ぜたもの）を亀裂内に充填し、漆が固まったら研ぐという作業を数回繰り返す。
  - D. こくその上にさび漆（漆に石の粉を混ぜたもの）を塗り、漆が固まったら研ぐという作業を数回繰り返す。
  - E. さび漆の上に漆を何度かに分けて塗り重ねる。
  - F. 最後に金箔を押し。
- といった手順で順調にすすめられた。

第四回の修理委員会は工事の進捗に無事余裕をもった形で迎えることができた。

委員会ではこれまでに施工が済んだ箇所を確認を行いつつ、判断に迷う箇所の仕上げ方について検討された。

中尊寺からの要望として、金色堂正面扉の亀裂補修と、

正面柱頭部の補修について、作業に追加することはできな  
いか確認した。

正面扉の補修について、亀裂補修は原則外壁を対象とし  
て行うこととされており、扉の内側はその対象外であった。  
しかし正面扉は普段開いた状態で内側の部分が外を向く形  
になっており、参拝者の間近で目にとまる箇所であるため、  
宗教空間としての荘厳という観点から、正面扉の亀裂補修  
は追加作業として委員会の理解を得ることができた。

もう一つの柱頭部の補修については、古い塗膜が遺って  
いる可能性もあり、あえて手を付けずにこの状態のまま次  
世代へ遺すこととした。

工事は予定の工期より早い十月末にはほぼ作業が完了  
し、十一月には細かい箇所の点検修正等が行われ、十二月  
十日、無事工事完了の運びとなった。

十二月十五日午後二時より、修理委員会委員、県や町の  
担当者、文建協および小西美術の関係者が参列し、中尊寺  
貫首導師の下、一山大衆によって竣工法要が厳かに営まれ  
た。

今回の修理にあたって、委員会で幾度も確認され、全員

## 薬師堂落慶に思う

菅野 康 純

令和三年三月十二日、陸奥教区宗務所長様並びに中尊寺  
貫首様、一山各院の御出仕によって、薬師堂落慶式が厳か  
に営われました。その時私は脇に座しながら、四十五年以  
上前に師であり実父でもある故最純と、母の故たかが「庫  
裏も直して、いまに薬師堂を建て替えるんだ」と言ってい  
たことを改めて思い出していました。私が小学く中学生で  
この境内を走り回って遊んでいた頃でした。

自坊の瑠璃光院は、昭和四十年代の終わり頃からお守り  
の頒布を始めました。最初は薬師堂の中でお守りを数種類  
お授けする形でしたが、お札所を設け現在のような頒布形  
式とするようになりました。その目的の一つが「薬師堂を  
建て替える」でした。始めた頃は参拝の方々もだんだん多  
く訪れ始め、数年後の元朝参りには多数の参拝の人となり  
参道で身動きが出来ない位に詰まってしまうことなどが起

が常に心がけていたことは、金色堂を、後世の人が見たと  
きに我々が今見ているものと同じものを見られるようにす  
る。そのためには徒に修理の手を加えることはせず、でき  
るだけ修理の痕跡をも伝えられるようにする、ということ  
であった。

最後に、この工事にかかわったすべての方々に、心から  
感謝申し上げて、報告としたい。

(管財部執事)



竣工後の金色堂北東面外観

き始めていた頃です。

しかし、この思いは瑠璃光院本堂の建替や境内の整備、  
修行道場の設計(未完)等々に費やされ、薬師堂建替は先  
送りされてきました。平成になる頃、父は体調を崩し入退  
院を繰り返していましたが、私が帰山し補佐を始めると「い  
つの日か庫裏修復より先に薬師堂建て替えが出来れば良い  
な」と語りはじめていました。数年後に、父はその思いを  
抱いたまま浄土へ旅立っていきました。残された母のたか  
は、「薬師堂を建て替えるのがお父さんのためだよ」と口  
癖のように言って、お札所と薬師堂で詠歌をお唱えして  
いました。

平成二十五年頃、薬師堂を建て替える方策を巡って大工  
さんと私で検討を始めましたが、なかなか具体的方策に到  
らず日々だけが過ぎ、そのうち母も体調を崩し入院、平成  
二十九年秋に逝去し、お札所はしばらく前から補佐をして  
いた私の家内が継ぎ、その思いは私達の代へ託されました。  
しかし、お札所を継いだ家内も病に倒れ彼岸へゆき、私と  
遺された子供達へと継がれてしまいました。

子供達と協議をして、平成三十年秋に建築計画を棟梁の

山田雪さんと再検討し、設計士さんへ相談、平泉文化遺産センターと協議を始め、発掘計画や建築の予定を一山法要である正月の修正会に影響がでないように考慮して取り組み始めました。

建物の大きさは間口三間奥行四間。屋根の形状は入母屋。内部は道場部分に間口三間に奥行き三間（内、須弥壇は奥行き六尺）、天井は高く吹き抜けの様子、外から見た切り妻の部分に排煙窓を設け（外見は網を張った格子）排煙・換気を確保。後ろ側には壁で仕切られた間口三間奥行一間の倉庫を設け、軒は少し長く、正面に向拝、両脇に回廊（濡れ縁）を備える形となりました。それに加え以前より境内土砂の流出が著しく、木の根の露出やぬかるみが発生していたので、これを解消・抑制するため併せて堂前の敷地を石敷とすることにしました。

工程の概略は、現状変更や種々の多くの手続きと打合せを経て、令和元年初夏に地盤確認調査を行い、夏には全面発掘の前段階として建物周辺の試掘調査を実施、この試掘調査を踏まえて取壊・本格発掘予定を協議して、翌年一月



毎月12日の薬師瑠璃光如来護摩供

中旬から解体工事、四月から六月まで発掘本調査（予定地全面調査）、七月から建築を始め十二月に終了落慶の予定でしたが、結果として三カ月遅延しました。

令和二年一月下旬、雪が少ない年であったことも幸いし、引越を行い中に安置された仏像と本尊様を母屋へ仮安置し、薬師堂を解体、更地にして四月に建築予定地の全面発掘調査が始まりました。前年の試掘の時点で予想されていたのですが、江戸時代と思われる建物の礎石七個が発見されました。（概要と写真は広報「ひらいずみ」二〇二〇年七月号・岩手日日二〇二一年三月二十日等に掲載）、このため保存処置と設計変更を行い基礎を基壇状に高くしました。続けて七月基礎工事、八月お盆前に資材搬入、柱が立ち、十月二日上棟式と進み、十二月に入って屋根の銅板工事が始まったのは良いのですが、その終盤に大雪に見舞われ、ここでもまた遅れが発生。やむなく薬師堂の修正会を光勝院で行なわせて頂くことで一山の了解を頂いた次第です。

年末も押し迫った頃に足場が解体され、開けて新年コロナウイルスの影響で参拝の方々も少ない中でやつとその銅板の耀く屋根を見ることが出来ました。一月は配電や内装・

防犯カメラ等の設備を行い、二月上旬に建物は完成、外構工事を始め、三月十二日落慶式を挙行させていただきました。

法要には本来なら今まで多くの皆様からの御助力を頂いての完成なので多数の方々へ披露させて頂くべき処ではありましたが、コロナ禍中の開催となり中尊寺貫首様を始め一山の皆様と陸奥教区宗務所長様、主だった職人の皆さんに参列・披露させて頂きました。残った外構も三月末に落ち着き、四月より皆様に参拝していただける形となり、約一年掛かり無事工事の円成を迎えることができました。中尊寺御一山を始め多数の皆様の御助力・御協力、師最純とたかそして家内と紡ぎ、迎えたこの新薬師堂です。お勤めをしながら、有縁の皆様と共に、中尊寺一山の益々の繁栄と、皆々様の日常変わりない日々を過ごせることを祈る場として後世に継いでいきたいと思っております。

※四月より、毎月十二日午前中に薬師瑠璃光如来護摩供を修しております。機会がありましたら御参拝頂ければ幸いです。

# 平泉世界遺産ガイダンスセンターに期待すること

八重樫 忠 郎

世界遺産登録十周年を迎えた昨年十一月、平泉町にとって、念願の岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンターが開館した。場所は、柳之御所遺跡の南、道の駅平泉の向かい側という好位置。外観のデザインは、道の駅とシンクロした深い切妻屋根、白と黒を基調とした色彩によって、平泉らしい落ち着いた雰囲気を出している。

中に入ると、エントランスからは、柳之御所遺跡越しに金鶏山を望むことができる。おそろしく、奥州藤原氏もよく見た風景。展示室では、最初に世界遺産としての平泉の価値について、映像やジオラマ等によって解説し、次には発掘された様々な遺物、さらに奥は平泉と関わりが深い地区など



平泉世界遺産ガイダンスセンター

の遺物等のスペースとなっている。

また、体験学習や柳之御所遺跡について学ぶスペースも設けられている。さらに柳之御所遺跡の出土遺物の整理や、平泉文化の調査研究についても、これからも継続して行っていくという。

駐車場が狭いという意見もあるようだが、ガイダンスセンター敷地すべてを含む形で、道の駅平泉として申請しているので、道の駅の駐車場を使っていただいても問題はない。というか今後、当町を目指す観光客の大半が訪れるエリアとなるように、両者が共存共栄する密接な関係を構築していくことが肝要であろう。

道の駅平泉がオープンしてから、道の駅のみを巡っているというお客様が、数多くいらっしゃるようになり、今までにはなかった新たな観光スポットを設けることができたと感じている。そしてガイダンスセンターによって、その魅力は三倍にも四倍にもなることが予想されるし、観光客の流れを大きく変えるかもしれない。是非ともに、そのようなってほしいと願っている。

冒頭に、念願の、と表現したのには訳がある。それは当町では長年にわたって、考古学研究所と国立博物館の誘致を目指してきたからである。近代日本における美術史学研究所の草分け的存在であった岡倉天心が、国立博物館を設ける地として、中尊寺を挙げていることにも因つたものだが、その一端が叶ったと感じている。

ガイダンスセンターも道の駅も、柳之御所遺跡の価値が認められ、バイパス等のルートが変更されたことよって、残地となった地区に設けられている。つまり柳之御所遺跡が発掘されなければ、両者は存在しなかったことになる。道の駅には今後も賑わいをもたらしてもらうが、ガイダンスセンターには、柳之御所遺跡が世界遺産に登録されるための調査研究も期待したい。

プロフィール

やえがし ただお

昭和36年岩手県生まれ

東北大学大学院修了 博士(文学)

著作『北のつわもの都平泉』など

現在平泉町観光商工課長

# 香りにのせて伝えたい、

## 平泉

南 洞 法 玲

この寺報『関山』に初めて原稿を書かせていただいてから三年が経ちました。背中に羽が生えた私は、さらにいろんなことにチャレンジしてまいりました。今回はその活動の一つ「平泉のかをり創造プロジェクト」について、この度はお話しさせていただきます。

そもそも私にとって「香り」は、お寺に生まれたということもあり、お線香など馴染みがありましたし、また僧侶になる前は、はりきゅう師としてお灸を使って治療しておりましたので、ヨモギから艾を作ったり、マッサージにはアロマを活用したりなど、香りは日常的な・身近なもので、以前より興味を持っていました。

そこにやってきた大きなきっかけ。

それは自称「義経のストーカー」との自己紹介をうけ、初対面から度肝を抜かれた前川佳代先生との出会いです。前川先生は奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所 協力研究員でありながら、「平泉は故郷だ」とこの地をとっても大切にしてくださいっている方で、源義経公だけでなく平安時代の平泉の都市構造やその時代の食についても研究されていていらつしやいます。さらに、平安時代に甘味



前川佳代先生

料とされていた甘葛<sup>かんかく</sup>というツタの樹液を熱心に研究されていて、私は平安時代のスイーツについてご教授いただきながら、一緒に平泉町内外でのツタ探しなどもしておりました。

そんなある日。先生から「甘葛煎はお香の材料にもなっていた」ということ。さらには「古代の文献から香りを再現している人がいるらしい」というお話が出てきました。平泉の平安時代の香りもあるのか？と私の好奇心が反応し始めます。そして決定打は、その研究をされている佐賀大学地域学歴史文化研究センター 特命研究員の田中圭子先生を紹介していただき、なんとメールのやり取りができてしまったのです。もうこれには運命を感じずにはいられません。こうして香りへのフラグが完全に立ってしまい、古代の、平泉の「香り」を探すべく猪突猛進していくのです。

田中先生は、複数の香料を調査した芳香剤の一種「薫物<sup>たきもの</sup>」の処方及び調合法について書かれた文献について研究し、さらにはその処方箋から実際に調査し、古代の香りを復元する取り組みなどを

されています。あの『源氏物語』でも光源氏などがお香を作っているという文章が出てくるようで、貴族たちの間で薫物は流行していたようです。そのようなお話を聞いておりましたらば、やはり作りたくりますよね。「私もその香りづくり・再現をやってみたいです」とお伝えしましたら、田中先生から「平泉に行きます！」とのお返事が。先生はすぐ材料など手配してくださり、数カ月後にお住いの広島県から飛んできてくださることに なります。



田中圭子先生



こうして、二〇一九年四月。第一回目のワークショップを開催。なんと、この日に合わせて前川先生も平泉に帰ってきてくださり、前川先生の甘葛煎のお話と田中先生の平安時代のお香づくりの豪華なワークショップとなりました。

この時は、平清盛の父・忠盛著とされる『香之書』より、清盛の弟・頼盛調合の「荷葉」という香りを再現作成しました。「荷葉」は蓮葉の唐名です。

練香は平安時代に特に流行した薫物で、粉状の香料を複数混ぜ合わせ、そこにハチミツや甘葛煎を加え、丸葉状に作り上げたお香です。練香の楽しみ方は、香炉に灰を入れ、そこに炭を焚き、温かくなった灰の上に練香を置きますと揮発作用で香りが広がります。作った練香を早速焚き、その香りを嗅ぎながらハスが咲き誇る当時の平泉を想像したのです。

第一回目がとても好評でして、今後もワークショップなど活動が続けていこうと調子に乗った

私。平泉のかをり創造プロジェクト”を発足させました。何回かワークショップを開催している中で、世界遺産登録十周年を二〇二二年に控え、そこに花を添えるべく、この香りを平泉の文化のせたお土産品として開発してみようとの話があり、チャレンジすることにしたわけです。

より良い商品を作るためには平泉の文化と香りの関わりについて知らねばと、平泉文化遺産センター参与の千葉信胤さんにもご教授いただきました。

先生のお話によると、平泉には香りの調合法などの文献は残念ながら残っていないということがわかりました。しかし、平泉の史跡からは香りの材料となるものが発掘されていること、金色堂にはヒノキアスナロという香料にもなる木材が使用されている、とのこと。仏教文化で栄華を誇った平泉。祭礼の際に〈香り〉は使用されていたことは容易に想像できますが、実際その時代の平泉に香りの材料となる物が存在した、という確認をすることができました。

そういったことなどを勉強しながら、さあ、こ

こからギアをさらに入れて突っ走るぞー！と足を踏み出したところに、あの感染症が猛威を振るいはじめます。メンバーが集まらず、流行りのリモート会議などしますが、香りは電波に乗らないですし、香りを言葉で表現するのがとても難しく大苦戦です。それでも、落ち着く頃を見計らって集まり、五つのサンプルを作成。香りの品評会を開催し、そのサンプルを一般のみなさまにも香っていただき、好きな香りに一票投じていただきました。そして、栄えある第一位となった香りをこの度の商品に採用いたしました。

この第一位となった香りは、日本最古の薫物指南書である『薫集類抄』(田中圭子著『薫集類抄の研究―附・薫物資料集成―』を参考)から、藤原冬嗣公の処方箋「黒方」という香りです。藤原冬嗣公は奥州藤原氏へとつながる京の藤原北家の方。薫物は代々そのお家に伝わっていくものでしたので、流れ流れて奥州藤原氏にもこの処方箋が伝わっていたのではないかと仮定しての採用となり

ます。

この黒方の処方箋には、皆様おなじみの沈香や白檀のほかに、鬱金(ターメリック)や丁子(クローブ)といった香辛料でもある香料などが調合されています。処方箋のなかに薫陸という香料も使用されるのですが、それを和の薫陸と言われている「久慈琥珀」に変えるアレンジをしています。琥珀は、柳之御所遺跡から発掘されており、平泉文化にも身近な存在です。こうしたものを使用することで、平泉のオリジナル性を出しました。

この香りは、冬の季節や慶事の際に焚くとされていますので、世界遺産登録十周年をお祝いする上でもぴったりの香りが商品化できたなと思っております。

そして二〇二一年九月。商品が完成し、発売がスタート。たくさんの方に手にとっていただいています。

商品となったのは香り袋「名刺香」・「文香」です。デザインは違いますが香りは同じ黒方です。名刺香は名刺入れに忍ばせ、香りを移らせること

(金剛院副住職)

丹精込められた大輪の菊

太平の銀峰、虹の大橋、瑞竜、ナザルバエフ大統領。あまり耳慣れない言葉ですが、これらはすべて私たち日本人になじみの深い花の品種名です。実は一口に「菊」といっても、その品種は日本だけでも数百種類。海外の品種も合わせるとその数は数千種にも及ぶといわれています。今回は本年から担当させていただいた「菊まつり」で学ばせていただいたことを振り返ります。

「中尊寺菊まつり」は今年で三十五回目を数える秋の恒例行事。毎年近隣の菊花会の皆様がお心を入れて育てた菊が境内を所狭しと彩ります。晩秋の参道は、モミジの木々が赤く染まり、紅の葉を透過した木漏れ日は、優しいだいたい

色になって路傍の菊を照らしまします。そんな紅葉真っ盛りの参道を歩くと、まるで油絵の世界にやってきたかのような、そんな気持ちになるのです。菊まつりの最後には審査会があるのですが、今回せっかくの機会でしたので、審査員の先生に「良い菊の育て方」について、しばしお話を伺わせていただきました。

「菊は春先に挿し芽を行い、幼苗のころから適切な環境を用意して丁寧に育てると、やがて秋のころにはしっかりとした花芯のあるつぼみができます。花芯をしっかりと作ることができた苗は、その芯を中心に花弁がきれいに広がった美しい花を咲かせます。しかし、芯がしっかりと一本通っていないと、花弁がそろって



菊まつりにて

きれいに広がらないため、大きな花に見えても実はいびつな、美しくない花になってしまうのです。大輪の花を咲かせた菊はやがて花芯を失いながらその花の一生を終える。しっかりとした芯をもった花を咲かせるために、それまでの管理を的確かつ丁寧にやるのが大切です。」とのこと……。

かつて比叡山での修行中に「自然から学びなさい」と言われたことがあったとおもう。私(四十二歳)は丁寧にしっかりとした芯を育てることができているのだろうか。

で、名刺と一緒に香りもお渡しすることができません。文香は、お手紙やお財布、携帯ケースなどにに入れて香りをお楽しみいただければと思います。デザインにもかなりこだわっておりますが、ここでは省略しまして、販売の際に直接お客様にご説明させていただきたいと思います。

かくかくしかじか、紆余曲折を経て、なんとかここまでプロジェクトを進めてまいりました。ここまで続けてこられたのは、支えてくれたスタッフのおかげです。

現在スタッフは私以外に六名おります。平泉や香りに興味があるだけでなく、植物が好きな方もいれば、薩摩琵琶を奏でる方、さらには平安時代を題材にしたマンガやアニメ、ゲームに香りが出てきたので興味を持ったという方まで。多彩な仲間が集まり、香りからいろんな分野に広がりを見せてくれており、大いに活躍してくださっています。

プロジェクト

は、現在次に向けてさまざまな企画を進めております。感染症が落ち着いてきておりますのでお香作りのワークショップも開催したいと思っております。

メンバーたちとともに、香りにのせて平泉をPRすべく、これからも活動を続けてまいります。みなさま、今後も応援をよろしくお願いたします。



名刺香と文香

プロフィール

なんとう ほうれい  
平泉のかをり創造プロジェクト代表

## 「妙なる教え」

菅野宏紹

天台宗の多くの寺院で朝・夕のお勤めで、読経する前に「開経偈」という偈文をお唱えします。

無上深甚微妙法  
百千万劫難遭遇  
我今見聞得受持  
願解如来真实義

僧侶のみならず、檀信徒の方でも日常お唱えしたこともあると思います。

私達はお寺に参拝し、時には法話の会などに参加して、御住職の有難いお話を伺うことがあります。お寺の御住職は日々御経を誦読していますので、知識が豊富で、そこから出てくる仏教の教えはまさに私達の生きる指針となります。

今では、情報網も発達してSNSも身近な存在となっていますので、全国の寺院の様々な情報や、仏教の教え、僧

華経」あるいは京都五山の大字送り火の「妙法」を思い起こしますが、この「妙法」は言葉にはいいつくせない、意味の深い教え、ということに繋がると思います。

「劫」で思い出したのは、私が、東京の大学に通う学生の頃に、先生方に連れられて居酒屋にいったことであります。その先生の好みもあり焼酎をご馳走になったことがあります。その焼酎の品名で「那由多の刻」というものに出会いました。仏教語の付く焼酎に正直驚きました。「那由多」とは難しく言えば「無量の大量」ということになりましたが、一、十、百、千、万、億、兆、京……もつと〇が多く付く、とてつもない長い時間を経過したことを「那由多」と言うわけです。この焼酎は長期間貯蔵して熟成したという意味なのでしょう。「劫」も「那由多」も想像もつかない長い年月を指す意味です。開経偈の「百千万劫」も計り知れない長い時間を指しますが、私達が人間として有難い教えに巡り会える幸せを噛みしめたいと思います。

最近ご縁があり、平泉から約一六〇km離れた地にある天台宗寺院の兼務住職の申しつけを受けました。月に一〜二回であります。長距離運転の苦手な私はいつも命がけで

侶の法話などは気軽に見聞きできるようにりましたが、昔はSNSも何もない時代で、お寺に行くのもやつとのこと、和尚さんのお話を聞くのもやつとのこと、という時代でしたから、まさに和尚さんから発せされるお話は、「この上なく有難い妙なる教え」(無上深甚微妙法)であり、やつとの思いでお寺に辿り着いて聞くことの出来るお話は「相当長い時間を経過しても巡り会うことができない有難い教え」(百千万劫難遭遇)であつたことでしょう。長い時間を経過しても巡り会えない程大切な教えを「私達はいま幸いにもそれらを見たり聞いたり、そして手にすることができております」(我今見聞得受持)という感謝の心が起きたことと思います。そして聞く人々は「願わくはその真実の意味を理解して身につけたい」と感じたことと思います。私達僧侶も、得度してから一人前の僧侶になるために、何度か比叡山に登り、天台座主様から得難き法を授けて頂き、普段は聞くことの出来ない有難い教えを直接聞く機会を得て、山を下りる時には、幾分か仏様の世界に身を置く自信を確かにすることになります。

ところで「妙法」という言葉を聞くと、私達は「妙法蓮華経」を有する寺院で、往古より地域住民の結束によって護られてきた寺院です。高速道路を運転して、兼務寺に向かっています。その寺は一三〇〇年の歴史を有する寺院で、往古より地域住民の結束によって護られてきた寺院です。

このお寺には不滅の法灯が奉安されています。不滅の法灯は天台宗祖伝教 大師最澄 上人が比叡山頂に一乗止観院を建立され、御本尊に灯明をかかげて以来一二〇〇年絶えることなく灯され続けている灯火です。これを分灯して頂いて奉安していますが、これも油を絶やさず檀家総出で護持しています。法灯もそうですが、法灯を通じて天台の教えを護持している姿、まさに開経偈に記されているとおり、「我今見聞得受持 願解如来真实義」の実践ではないかと感じています。

私達も、妙なる法を常に求めながら前に進んでいきたいと心に誓って参りたいものです。

(利生院住職)

## 十分間

H11法話グランプリ2021に参加して  
破石晋照

昨秋、奈良市「なら100年会館」で開催されたH1(エイチワン)法話グランプリに参加させていただきました。

このH1グランプリというのは、法話(Howwa)の頭文字Hをとってネーミングをされたもので今回が二回目の開催です。同じ天台宗の僧侶が中心となって企画を立ち上げ、二〇一九年に第一回を開催。その後はコロナウイルスによる開催自粛もあり、昨年ようやく二回目の開催となりました。「最近西日本では法話が流行っている」ということはかつて聞いたことがあるのですが、H1グランプリという催しが行われているとは存じ上げませんでした。

この大会は宗派を問わずに全国から本選出場を目指す僧侶を募り予選が行われ、各宗派から一組ずつ十月の本選への出場者が決定されます。私のところに予選参加を促す連

す。数日間試行錯誤しながら法話を作り、稽古を重ねて予選に備えました。

法話を書いていた初夏の頃は、世の中の話題が良くも悪くもオリンピック開催に向かっていた頃。私はそれにあまり「多様化社会・共生・共存」をテーマとし、私が得意な分野でもある「狂言」の『宗論』という演目からヒントを得た台本を制作しました。法話は僧侶一人が壇上に上がりお話をするというスタイルが一般的ですが、今回の法話は二人で行う法話で、私としては初の試みである。台本を使ったセリフ劇にさせていただきましたので、練習をして形ができるまで『法話として成立するのか』という不安がありました。けれど、よく考えてみれば法話の様式に決まりごとはありません。あるとすれば聴衆の皆様は仏様の教えを伝えるということぐらいですので、その点だけは間違わないように制作し、最終的にはその点の不安はなくなりました。伝統芸能に触れながら育ってきた私としては『もともと芸能は宗教から発生し、やがて今の形となった。今再び宗教と深く結びついていた頃の芸能を作ってみた』という、かねて胸に秘めていた思いを実現したかったので、

絡がやってきたのは六月のこと、確か予選締め切りの三週間ほど前のことだったとおもいます。参加をするとなれば、新しい法話を書かなくてはならないのですが、残り三週間では少し大変。また、その時は、一体全体どのようなイベントなのかということがピンとこなかったため断るつもりでいたしましたが、同じ天台宗の僧侶の方々が、布教のために一生懸命この法話の大会を企画・運営されていらつしやるということと、声をおかけいただいたことに思うところが、おとなり毛越寺の同級生僧侶と二人で相談ののち、おつきあいでの予選だけは参加することを決めました。

半ば二つ返事で参加を決めたものの、法話を作るとなれば僧侶として中途半端なものを作るわけにはいきません。今回は同級生と『二人法話』を行うことにしていましたから、大会規則の制限時間「十分」に収まり、それぞれの持ち味が十分に生きるような、単純で明快で、かつ楽しい法話になるよう心掛け法話を構成していきます。幸い件の同級生とは普段から二人法話を行っているので、法話をしていくときのリズムや表情、得意な言葉を理解し合っています。

締め切り直前、ある程度の形となった法話を撮影し応募。最初は何となく始めたH1グランプリへの参加に対し徐々に本気になって法話の制作と稽古をしていく自分の変化に気づき始めていました。

締め切り直前、ある程度の形となった法話を撮影し応募。とりあえず苦労は一段落し、やりたいことはやり終えて満足し、あとは野となれ山となれ、やがて応募をしたことすら忘れて過ごしていました。

数週間の後、差出人にH1グランプリ事務局と書かれた封書がとどきました。『そういうえば応募したな』と封を切ってみると、そこには予選通過の通知と、本選当日の案内が入っていたのです。『まずい…通過してしまっただけ…』封を切った時の複雑な心境は今でも覚えています。もともと予選に応募するだけだと思っていましたし、当時の状況を考えると気安く県外に、しかも遠く離れた奈良まで行くことなど、きわめて不安な状況でしたから、自ら応募をしておいて大変身勝手な話ではございますが、「辞退」ということすら頭をよぎりました。体よく断ろうと事務局に電話をすると、「出場の可否の判断は直前で結構です。五十組程度の応募があり、本選に出たくてもかなわなかった方も



奈良市立飛鳥中学校のアートパフォーマンス部による作品を前に開会式が行われた

いらつしやいますので、結論は急がないでください」とのこと。本選まであと三カ月、私たちは参加の結論は保留させていただき八月を迎えました。

秋のお彼岸を過ぎているころ、十月末に行われるH1グランプリが気になり始めました。果たして私たち同級生コンビは本選に出場するのか否か、まだ結論は出ていません。しかし、私たちを取り巻く環境は少し変わり始めていました。コロナウイルス感染者数は徐々に少なくなり、あちこちで緊急事態宣言が解除され、人々の往来・交流が始まりました。また、その間に、H1グランプリ本選を目指して応募したものの、予選を通過できなかった方や、宗内・宗外を問わず多くの方々からたくさん応援メッセージを頂戴しておりましたので、『可能であれば万全の準備をして奈良まで行きたい…』私の心境も大きく変わっていたのです。

十月のある日、法話の相方と二人で出場の意思確認を行い、真つ先に先輩に相談をしに行きました。すると、ありがたいことに、「気を付けていけば大丈夫」と背中を押し

てくれたのです。十月三十日の本選参加が可能となりました。

本選当日、奈良駅前には雲一つない青空が広がっています。前日の夜に飛行機で奈良に入り、ホテルで最後の稽古をして会場に向かうと、会場には既に長蛇の列ができておりました。もともと一五〇〇人程度が入ることができる奈良駅前のホールを、感染症対策のため半分程度のチケット販売にしたそうですが、前売り・当日券ともに完売。大きな催しものだと聞いていましたが、ここまでのものとは想像をしていませんでした。会場ではステージ上にセットを並べ、映像と音楽を使って行う開会式のためのリハーサルをしています。おそらく百人以上のスタッフがこの催しに関わり、地元の高校生も参加をしていました。地域をあげての法話の会に携わって支えてくれる多くの皆さんの姿に感動したことを今でも覚えています。

開会式が終わり、各宗の代表者が順番に登壇していきま

す。私たちの順番は一番最後。ほかの登壇者たちがそれぞれに法話を終えて、緊張から解放された清々しい顔で戻ってくるのを迎えながら、集中力が途切れてしまわないよう

にひたすらに順番を待ちます。ついに一組前の登壇者がステージに上がり、私達は舞台上手ソデで待機をする。張り詰めた空気の薄暗い舞台ソデで登場を待つ。これほどに心地よい緊張を感じたのは本当に久しぶりだったと思います。この数カ月、本当にこの場に立てるのかどうかかわらないまま、悩みながら稽古を続け、やつとたどり着いたステージでの十分間、もはや何も悩む必要はない、稽古したとおりに体と頭に任せての最後の十分間です。

上がってみれば、あつという間の十分間。法話の終盤に差し掛かるとき、いつまでもその緊張の中に居たくて、「もう終わってしまう…」と名残惜しい気持ちになったことを覚えています。ステージから降りて相方と反省会…。いつでも稽古してきたことは間違いなくできました。色々あつたけど本当にここまで来てよかったという感想を言い合うだけ。ライブ配信されていた画面にはたくさんメッセージが寄せられていました。こんなに晴れがましい場に出場させてもらったこと、悩んでいる中で背中を押してくれる人がいたこと、快く送り出してくれた人がいたこと。イベン

先日は、中尊寺の説明や、歴史などについて、教えていただき、ありがとうございました。ぼくは、社会の授業で源氏や奥州藤原氏などについて学習しましたが、中尊寺に行ったことで、社会の授業では知ることができないことや、ぼくの知らなかったことを学ぶことができました。

洋野町 小学校六年 Y・O

十月の修学旅行では、大変お世話になりました。金色堂は天井も柱も、仏像も、細かいところまで金箔がはられていて、想像よりすごくておどろきました。紅葉がとてもきれいでした。今度、また家族と行きたいと思います。

宮古市 小学校六年 A・Y

修学旅行ではとても貴重な見学ができました。すべて金色の金色堂、讃衡蔵の中にあつた大きな仏像は、はくりよくがあり、とても印象にのこつています。たくさん国宝や重要文化財を見て藤原氏や中尊寺の歴史を知ることができました。ありがとうございました。

宮古市 小学校六年 K・K

この前は、座禅体験をさせてくれてありがとうございました。すわっている時間が長かったけど、身も心もしっかりと清められました。でもすわっているとき少しづつきつくなつた部分もありました。コロナに負けないようにがんばってください。

宮古市 小学校六年 A・U

金色堂のみりよくや座禅のやり方についておしえてくださり、ありがとうございました。金色堂は金箔がすべてにあつて、テレビで見るとおどろきました。座禅では、少しきんちょうしてしまつたけれども、すわり方や礼のしかたなども、きちんと覚えることができてよかったです。

宮古市 小学校六年 K・K

授業で習つて中尊寺金色堂のこととは知っていましたが、本堂に行つてみるとくわしいことまで知ることができました。紅葉が赤く色づいていてきれいで楽しく見学することができました。ありがとうございました。

青森県 小学校六年 S・K



法話の様子 今年一番短く感じた10分間

トの成功のために協力してくれた本場に数多くの人々のことを考え、目頭の熱くなる思いでした。

二〇二一年コロナ禍、日本中で多くの行事が中止となり、多くの方々の思いが遂げられない日々が続いています。しかしそのような状況の中でも、努力と工夫と情熱で大きなイベントを成功させた人たちを目の当たりにしました。状況はいつも厳しい。しかしそのような中でどうにか道を拓いて、可能性を最後まで探す努力をして実現できる何かがあるということ。H1グランプリは、観客はもとより登壇した私達にも大きな学びと希望を与えてくれました。

追伸 H1グランプリでは、観客の投票によってグランプリが一組選ばれます。グランプリを獲ろうと意気込み頑張つたのですが、残念ながらの結果でした。もしかしたらその欲をもって無心になれなかつたことが仇となつたのかもしれません。

(金剛院副住職)

## 桜の開花にちなんで

— 四月十日本堂法話より —

佐々木 五 大

三月二十一日に二回目のコロナ緊急事態宣言が解除されたものの、四月に入ると全国の新規感染者数は再び増加に転じ、一日に三千人を超えるようになりました。ご参拝の方々においても、僅かでも春めいた空気を味わいたい、というお気持ちのように見受けられましたので、折から見頃を迎えていた桜に事寄せてお話をいたしました。

三月末までは、出版物への境内写真掲載に関する事務を担当しておりました。どちら様も、桜の名所として中尊寺を紹介したい、というお考えでご相談くださるのですが、境内には桜並木や、名木というほどの桜がありません。

本坊の鐘楼前に見える木は、てっぺんから幹が朽ちてまわりまして、やむなく地面から三メートル程のところまでばつさりと切りました。果たして残りの枝だけでどれくら

い持つのか、とも思っておりましたが、よく今年の大雪を耐えて咲いたものだと感心しております。地方ニュースでは、現在平泉は満開と伝えておりますが、町内とは気温差があり、境内では八分咲きといった感じです。

昨日も降雪がありました。開花したばかりで花粉が残っているため、容易に散りません。よく雪月花といつて、この三つが同居した情景が殊に風流ということなので、昨晩スマートフォンを持って撮影に挑みましたが、月が細くて（新月の三日前）絵になりませんでした。そもそも「雪」の時点で、空には雲がある前提になります。この「雪は降らせても、月は覆わないほどに雲がある」というのが、どうにも難題です。

境内のお花見スポットとしては、月見坂参道途中の展望台がおすすめできます。眼下の斜面に育った桜のほかにも、北上川を隔てて、遙か向こうに望む東稲山山腹の春景は、遠目にも見応えがあります。

この東稲山には「西行桜の森」と名付けられた一帯がありまして、ここは西行法師が「聞きもせず東稲山のさくら花吉野のほかにかかるべしとは」と詠嘆した景色を後世に

残すため、植樹活動が行われております。

西行桜の森も、また中尊寺境内においても、多くはエドヒガンという種類の桜です。このエドヒガンとオオシマザクラを交配させて生まれたのが、有名なソメイヨシノです。実は近年このソメイヨシノについては、東稲山にあまり植えてくれるなという動きになって参りました。

ご存じの方もいるでしょうが、ソメイヨシノは園芸品種として、挿し木・接ぎ木といった方法で株を増やします。するとどの木も遺伝情報は一緒、いわゆるクローンです。しかし桜には、自身の花粉からは実を作らない性質（自家不和合性）があります。するとソメイヨシノの森があつたとしても、お互いの花粉を持つ遺伝情報は自分と同じですから、いつまで経つてもサクランボが作られません。

ソメイヨシノの森は人の手で新たに植え足していけないと、それぞれの木が枯ればおしまい、一代限りの森です。そんなわけで、広範囲に植樹するにはあまり適さないという事です。またソメイヨシノは江戸時代にできた品種なので、平安時代に西行が歌に詠んだ桜とも異なる、という理由もあるようです。



本堂前の桜

さて仏教においては、花は二通りの意味合いを持つております。一つには「悟り」の象徴としての花でございます。仏様が長い修行の末に「悟り」という花を咲かせた。だから私たちも自分に具わった悟りの種（＝仏性）を育てていきましよう、という教えです。ここで言われる花は蓮がイメージされたもので、仏像の台座にも蓮をかたどった「蓮華座」という意匠が一般的です。

もう一つには「散る花」「萎れゆく花」に象徴されるような、ものの命にはすべて限りがある、すなわち諸行無常であるという教えです。我が国では、何と言つても桜の花が連想されます。

たとえば『古今和歌集』に、紀友則の「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」という歌があり、百人一首にも入っています。大意としては「陽光もどかな春の日だというのに、なぜ心落ち着きなく桜が散つていくのだろう」という歌です（古文の授業で、「散るらむ」がよく助動詞の用例に挙げられたので、和歌に疎い私もこの歌だけは覚えております）。

紀友則に限らず、古来より多くの文化人が、儂く散る桜

の植物に過ぎず、一つの物質に過ぎません。いつ散つてしまふのだろう、などと気を揉むことはありませんが、花を特別視しない以上は、お花見をしようという気持ちも取り立てて起こらないのが空観です。

次に仮観であります。仮観では、花が果たす役割や、我々にもたらす喜びといったものも、また縁によつて生じるのであるから、殊更にこれを否定しません。花を愛で、実を樂しむこともあり、花が散る様に寂しさを感じるのもまた自然なことだ、というのが仮観です。

最後に中観と云つて、それまでの空観と仮観が両立調和した状態があります。空観を踏まえれば、散る桜にも「死の象徴」という程の脅威はなく、また仮観に基づくならば、「万物に実体はないから」などと超俗的な物言いをして、周囲から心配されることもありません。

また当然ながら、仏様はこの中観が十全なバランスではたらいておりますが、そればかりではありません。まず空観で見て、次に仮観で見て、というように順番に認識しなくとも、ぱつと同時に事象を捉えることができるのです。これを「一心三観」といいます。

に世の無常を仮託し、和歌に残しました。これらの歌は、お釈迦さまのように諸行無常を悟ることができずにいる、自分自身の未熟さを謙遜するものであるともいえましよう。

ところで、この諸行無常をしつかり体得できれば、咲く花、また散る花を目の当たりにしても、一喜一憂せずに済むのでしょうか。しかしそうなると、感動が無い人間というか、せつかく四季のうつろいを前にしても、ずいぶん無味乾燥な心理状態のような印象を受けます。あまり「そうありたいものだ」と思えてきません。そこでご安心いただけるように、本日は「三観」という言葉をご紹介いたします。

天台宗の教えでは、「ものの捉え方」には空観・仮観・中観と云つて、三種類あるとされています。

これを順番に体得した場合、はじめに空観であります。空観を一言でいうと「全ての事象には実体が無い」という目で世界を見つめることです。空観をもつて桜を眺めると、先に述べたように、花・実といった（我々が注目しがちな）個別の事象にとらわれず、桜も一つの樹木に過ぎず、一つ

難しい仏教用語の説明になってしまいました。皆様がこの後、また参道をお歩きになることでしょうか。桜を見つきましたら、ぜひ三観を切り替えながら眺めてみてください。仏道の修行を兼ねたお花見ができるものと思えます。

（円乗院副住職）



参道 月見坂の桜



# 中尊寺「役僧」のはじめ 光勝院での坐禅指導体験

黒澤 崇泰

はじめまして。令和二年四月一日より中尊寺の役僧を仰せつかつております黒澤崇泰と申します。岩手県一関市川崎門崎にある「石蔵山最明寺」の副住職としても務めております。従来、最明寺歴代の僧侶たちは自坊のお務め以外にも、百姓や会社勤め、現在の私のように他寺院でのお手伝いと二足の草鞋を履いて過ごすことが常となっていました。私も、得度はしているものの、中尊寺にお世話になる以前は会社勤めをしており、背広を着てネクタイを締めた生活をメインとしていて、僧侶としてのお務めは正月やお盆のときぐらいにしかできておりませんでした。この度ご縁があり、中尊寺よりお声がけをいただいていたから、はじめ僧侶としての日々を過ごしております。

令和二年四月に落慶法要を迎えた中尊寺の修養道場「光

ら、平泉や中尊寺に関する基本認識や参拝者に対する接し方などを聴くことができました。ここ最近、多くの子供たちの坐禅修行体験や一般のお客様の写経や法話を受け入れることもできて、私も何度かその担当を、特に小中高生の学生旅行団体の坐禅を担当する機会が多くあります。

坐禅中の子供たちは、様々な修行姿を見せてくれます。足や背中の痛みや痺れに耐えながらもじする子や、同級生がじつと動かないさまをニヤニヤしながら横目で覗き見る子、苦悶の表情を合間に浮かべながらも凛とした坐禅姿勢を最後まで維持し続ける子など。さらに子供たちへ「禅杖」を授ける際には、一層良い反応をします。一人一回ずつ「禅杖」を受けていただきます。禅杖とは閻魔様や平安貴族が手に持っている笏をもつとスリムに長くした様な形のもので、坐禅修行者に喝を入れる平たい棒、のイメー

ジが強いかもしれません。他宗派や他寺院では「警策」と呼ばれたりもします。しかし中尊寺における禅杖の役目は、傍から見てもゆらゆらと坐禅姿勢の定まらない修行者の雑念や邪念を戒めることを主としているわけではありません。

勝院」において坐禅・写経・法話、その他折々の諸行事をサポートする専属担当ということで、「役僧」制度が中尊寺で施行されまして、その第一号として務めさせていただくことになり大変光栄に感じております。後に続く中尊寺役僧たちの規範となるお務めが出来るよう気を引き締めてお務めをして参ります。

一昨年の四月は、日本国内で初めて三桁の新型コロナウイルス感染症者数が発表され、七都道府県に緊急事態宣言が発令されるなど、正にコロナウイルスが猛威を振るいだした時期です。新型コロナウイルス感染症により影響を受けた方々に心よりお見舞い申し上げますとともに、全国の医療従事者はじめ保健・感染防止にご尽力されている関係者に敬意と深い感謝を申し上げます。

そうした事情から、しばらくは大きな行事が行われることもなく時が過ぎていきました。その間、役僧の私は山内清掃に勤しみ、主に中尊寺本堂で行われる感染対策のために縮小された各種法要・行事の準備手伝いをさせていただき、一山御住職を始め山内にてお務めされている先輩方

あくまで、「坐禅修行者を手助けするため」のものです。禅杖を上手に受けることができると、姿勢を固定し続けるために固まつてしまった背中や腰の筋肉に程よい刺激を与えることができ、坐禅の副産物であるスジや筋肉の痛みをしばらく和らげてくれる効果があります。もしくは眠気との戦いの助けになつてくれるでしょう。己が中に「空」を発現・実感するための坐禅修行は、痛みや痺れ眠気などの雑念・邪念を己の中で受容・昇華させることにこそ意味があるのでしょうか。禅杖は、坐禅している人が自ら拳手して受けることが望ましいところではありますが、限られた短い時間の中での坐禅修行「体験」ですから、一人一回ずつ禅杖を体験してもらっています。厳密には一人左右の背中三打ずつの計六打叩かれます。一人六回というと、子供達

は周りの同級生と目配せしながら苦笑いをし、中には一段と緊張の色を濃くする子もいます。実際に禅杖を受ける瞬間も子供たちの反応は十人十色で、じつと我慢する子や、かすかに震えながら怯える子、「お手柔らかにお願いします」と言わんばかりにこちらの顔を上目遣いで見る子、そして「なんで叩かれなきゃいけないの」とふてくされた顔

をする子いろいろです。意気軒昂と修行に挑むか、修学旅行の旅程の一環だから仕方なく済ませるか、修行態度に違いはあれども、懸命に坐禅を組む姿は微笑ましく美しく感じます。時には、私自身の精進度合いを戒める鏡として大いに気付きを得るものでもあるのです。

私が維那(修行を指導する僧)を務めさせていただき子供たちの坐禅体験は、坐禅の歴史に触れることから始まり、読経、そして坐禅手法の説明と準備体操、坐禅(中尊寺では数息観(「呼吸の数を数えること」にのみ意識を注ぐ)に行います)、クールダウン体操、読経、その後少し坐禅に関わるお話し、という流れです。その最後の法話で、学校や部活動・友達との日常の合間に坐禅(数息観)を取り入れることによって、心を穏やかな状態に戻すことができたり、物事の見方や自己の感情・意識を見つめなおすことができるといいですね、という様な話をします。こういった話をすると、引率の先生方は「うんうん」という表情で聞いていただき、一部子供たちは「なるほどなあ」という反応をしてくれます。もちろん、「早くこの修行会場を後

にしておみくじを引きに行きたい」と思えるような反応をする子もいるわけです。

ここ二年近く坐禅修行体験に携わらせていただいた私は自分の話す内容に少なからず自信を持って発言をしているつもりでした。しかし一度だけ、弱視の生徒一名が在籍する支援学校修学旅行の坐禅維那を務める機会がありました。

完全に視力を失った状態ではないのですが、光源を感じる程度だったようです。その日の坐禅体験の後も、いつもながらの話を締めくくりとしたのですが、終わった後に自分の話を振り返りよくよく反芻してみると、自分が如何に未熟で精進不足であるかを痛感することとなったのです。

私は有難いことに五体満足で各感覚器官も健常に与えられ育てられました。その健全な体を持って考え話したものは、不自由ない体の感覚を持った人の話でしかなかったのです。私たちが外部から得られる情報の内、視覚から得られる情報量は約八十七%を占めているそうです。目が不自由な方は、その約九割を聴覚や嗅覚、触覚などで代替して情報を補完していることとなります。「外界から入ってく

る情報を極力遮断するために目を半眼にして自分の中を見つめなおす」などという話は、元から視覚情報を頼りにしていない人からすれば理解を得ることができなかったはずです。そして私よりもよほど物事の真理を自身の中で受け止め、自分自身を見つめ直す時間が多いと思われれます。そういったことを深く考えもせず、他の子供たちと同じ様にその子に対して、偉そうに「坐禅とは数息観とは」などと鈍感さをひけらかす様な恥ずかしい話をした自分を禅杖で滅多打ちにしたい気持ちでした(ちなみに、禅杖をその様な用途に使用してはいけません)。

私の中尊寺にお世話になる前、会社員新卒時代に学んだことの一つとして、自分の提案を聞いたクライアント(相談者・顧客)の立場になり、提案に対して「何故?」と問い、筋の通った回答をし、その回答に対しても「何故?」を二回繰り返し返して、それでもなお筋を通すことが出来れば良い提案となる、というものがありません。弱視の子の坐禅維那をしたころの私が、事前に何を話してあげるかを熟考し、その子の立場になって三回「何故?」を繰り返せば今

回のように無様な結果にならなかったかも知れません。そしてその子にとつて生涯で唯一であったかもしれない坐禅修行体験を更に思い出深く、今後の人生の一つの糧として授けることができたかもしれません。「眼識」を持たない人に対する坐禅指導の知識が無いばかりか、相手の立場になつて物事を考えろという慈しみの基本中の基本を忘れていた私に、あの弱視の子は、私に僧侶・社会人・人として、改めて初心に帰る機会を与えてくれました。

清衡公が思い描いた恒久的な平和を願ったこの平泉の古刹、関山中尊寺で役僧という場を与えられたご縁、そして、この子からいただいた尊い気付きを大切に育て、光勝院での坐禅に限らずいろいろな体験をされた方々へ、ほんの一片だけでも「抜苦与楽」を感じてもらえる体験を提案できる様、日々、精進を続けて行きたいと思っております。

(中尊寺役僧)

# 新刊紹介

(令和三年一月～十二月)

## 〈書籍〉

『平泉の文化史3 中尊寺の仏教美術 彫刻・絵画・工芸』

吉川弘文館 監修者：菅野成寛 編者：浅井和春・長岡龍作 四・十

『奥大道 —— 中世の関東と陸奥を結んだ道 ——』

高志書院 編者：柳原敏昭・江田郁夫 五・二十五

## 〈報告書〉

『Report of the Workshop on the Construction of Yanaginogoshō Iseki under Buddhism』

Edited and Published by the Iwate Prefectural Government  
KAWASHIMA PRINTING Co., Ltd 2021.2.26

『岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第32集

骨寺村荘園遺跡確認調査報告書 駒形4-1地点』

一関市教育委員会 三・二十二

『令和2年度 骨寺村荘園遺跡村落調査研究報告書』

一関市博物館 三・二十六

『岩手県文化財調査報告書 第160集 平泉遺跡群発掘調査報告書

柳之御所遺跡 —— 柳之御所遺跡 第81次発掘調査概報 ——

高館跡 —— 高館跡第7～10次内容確認調査 総括編2 ——』

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・二十六

『岩手大学平泉文化研究センター年報「第9集」2021』

国立大学法人岩手大学平泉文化研究センター 三・三十

『岩手県平泉町文化財調査報告書第137集

特別史跡無量光院跡発掘調査報告書XVII —— 第46次調査 ——』

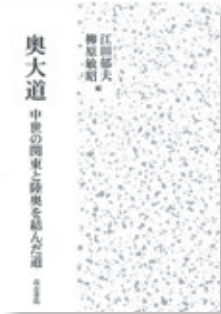
平泉町教育委員会 三・三十一

『岩手県平泉町文化財調査報告書第138集 平泉遺跡群発掘調査報告書

祇園II遺跡第17・18次 伽羅之御所第30次 中尊寺跡第92・94次

無量光院跡第43・44・45次』

平泉町教育委員会 三・二十九



『岩手県平泉町文化財調査報告書第139集

名勝 旧観自在王院庭園発掘調査報告書Ⅱ

— 第11次調査 —

平泉町教育委員会 三・三十一

『平泉学研究年報 第1号』

発行：『世界遺産平泉』保存活用推進実行委員会

編集：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課 三・三十一

『平泉文化研究年報 第21号』

岩手大学平泉文化研究センター

編集：岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課

『一関市博物館研究報告 第24号』

一関市博物館 三・三十一

『国宝 中尊寺金色堂 修理工事報告書』

発行：中尊寺

編集：公益財団法人文化財建造物保存技術協会 三月

『令和2年度 平泉の文化遺産拡張登録に係る調査研究業務委託報告書』

株式会社プレック研究所 三月

『重要文化財 天台寺本堂及び仁王門 修理工事報告書(本文編・図版編)』

著作：編集：公益財団法人文化財建造物保存技術協会

発行：宗教学法人天台寺

三月



無量光院跡全景

## 一枚の写真から〈4〉

北嶺澄照

(薬樹王院住職)



### お発ちの朝

写真中央は中尊寺中興第二十四世蘭實圓大僧正。終戦直後の昭和二十年（一九四五）八月二十日に中尊寺住職にご就任。二十五年の奥州藤原氏御遺体学術調査、三十年の讚衡蔵建設（現讚衡蔵は平成十二年完成の二代目の建物）、金色堂の「昭和の大修理」開始に取り組まれ、今日の中尊寺の佇まいの基礎がこの時固められました。毎年十一月中旬に御自坊の群馬県下仁田の常住寺へ。三月初旬に中尊寺へ帰山されていきました。写真左は先代の円乗院住職佐々木實高師、左端は観音院住職の曾祖母清水コトジさん。右側は三代前の大徳院住職佐々木教育師。群馬への「お発ちの朝」の一枚です。

〔関山句囊〕

（令和三年六月二十九日 於天尊寺）

〔第六十回 平泉芭蕉祭全国俳句大会より〕

（當日句入選）

みほとけの光溢るる句座涼し （大会長賞）

\*長谷川 權選 特選 奥州 梅森 サタ

天に地に花開きけり夏椿 （天尊寺賞首賞）

特選 一関 渡部 容子

みちのくは梅雨に入りけり磨崖仏 （毛越寺賞首賞）

特選 北上 小原十三丸

旅人や梅雨のささやき寺に聴く

秀逸 奥州 齊藤 瑞子

三体の佛に取るや夏帽子

秀逸 奥州 鈴木 正子

戦ひの後の閑けさ蓮ひらく

秀逸 奥州 小野寺正美

涼しさやがらんだうなる覆堂

秀逸 盛岡 兼平 玲子

さみだるる水の惑星平泉

佳作 平泉 岩淵 洋子

古代蓮煽られ時間裏返る （岩手県知事賞）

\*白濱一羊選 特選 一関 江原 遅筆

木下闇いつしか風の南無阿弥陀仏 （河北新報社賞）

特選 一関 佐藤 光枝

万緑のスクリーンに雨芭蕉祭 （岩手日報社賞）

特選 奥州 齊藤 瑞子

光堂守る背山のほととぎす

秀逸 平泉 旭 光

鐘声の尾を引く余韻梅雨曇

佳作 平泉 岩淵眞理子

緑蔭に命きらめく弥陀の池 （岩手県議会議長賞）

\*小畑柚流選 特選 大崎 木村螢雪子

丈六の釈迦如来仏風涼し （岩手日報社賞）

特選 盛岡 村井 好子

十二支の守護神ならば木下闇 （天尊寺賞）

特選 一関 菅原 節香

あぢさゝの雫落ちけり衣川

秀逸 宮城県 横山 洋

平泉の日なり十年目の茅の輪 （平泉町教育長賞）

\*小林輝子選 特選 大崎 佐々木克狼駄

老鷲がこゑ透きとほる能舞台 （岩手日日新聞社賞）

特選 一関 佐藤 冬扇

くたびれて息つくところ額の花 （毛越寺賞）

特選 花巻 川村 健

いつか行て浄土に舞へり梅雨の蝶

秀逸 平泉 佐々木邦世

東稲山の風の濃くなる青田かな （平泉町議会議長賞）

\*渡辺誠一郎選 特選 北上 小原十三丸

草刈や葉裏をのせし大礎石 （岩手日報社賞）

特選 宮城県 横山 洋

木下闇いつしか風の南無阿弥陀仏 （岩手日日新聞社賞）

特選 一関 佐藤 光枝

三体の佛に取るや夏帽子

秀逸 奥州 鈴木 正子

藤原も蝦夷も浄土未草 （平泉観光協会賞）

\*照井 翠選 特選 花巻 川村 健

滴りや供養願文絶えずして （河北新報社賞）

特選 一関 佐藤 光枝

下闇へ放つ螺鈿の真珠光 （岩手日日新聞社賞）

特選 奥州 佐藤 年末

残されし枕の窪み麦の秋

秀逸 宮城県 加藤無辺子

(応募句入選)

(投句総数 九〇八句)

\*長谷川 權選

天 しゃぼん玉中にあらはる光堂

一関市 小岩 浩一

句評 あらはるとは不思議な句。映像も美しい。

地 新緑を映して金の佛達

一関市 伊勢田あきを

句評 荘厳な一句。金と緑の配色もいい。

人 草笛を吹けば八十路の音色かな

八尾市 龜山 常男

句評 八十路の音色とは。しづかに長寿をことほぐ。

秀逸

喜雨の音金色堂の中に聞く

湯沢市 園部 露郷

\*白濱一羊選

天 水攻めのごとくに散居田水張る

奥州市 小野寺勝次

句評 家がちらばって建っているのが散居。胆沢町などは典型的な散居村として教科書にも載っていた。田に水を張った散居村は、まるで水攻めされたように見えるという句意。

地 毒蛇が高値で売れている秘湯

北秋田市 五代儀幹雄

句評 「毒蛇」は蝮だろうか。生きたまま瓶詰にでも売られて売られているのだろう。高価なのに売れているとは秘湯ゆえか。

人 雪解寺古銭と思しきもの拾ふ

秋田市 柴田 五風

句評 「古銭と思しきもの」は結局何だったのか。その場所が寺であるからこそ、それらしく感じる。

秀逸

平泉の日貸杖軽くぬぐひけり

奥州市 及川 英子

\*小畑柚流選

天 能舞台前座は蝉の序曲かな

奥州市 小野寺洋一

句評 能舞台は静かな雰囲気の中で開幕を待っている。折柄、蝉が鳴き出してあたかも序曲を告げるかの如き雰囲気。作者はその至福に浸っているのである。

地 朱の寺の瓔珞ゆすら青葉風

奥州市 梅森 サタ

句評 古刹の破風を飾る瓔珞が折からの風に揺られて、えも言われぬ微かな音を奏で、訪れた作者は尊厳の一刻を賜ったのである。

人 みちのくの栄華知りたる古代蓮

盛岡市 齋藤 雅博

句評 平泉の古代蓮は、その栄華を語るごとく咲き継いでいる。平泉文化を伝えるかの如く各地にも株分けされ、昔を偲ぶ縁となつている。

秀逸

彼の世より秀衡現るる薪能

秋田市 岩谷 塵外

\*小林輝子選

天 旅人の句碑に寄り添ふ今年竹

奥州市 大石 文雄

句評 中尊寺の能楽殿に行く径の途中、竹林があり、そばに山口青邨の「人も旅人われも旅人春惜しむ」の句碑がある。今年はそのすぐそばに竹の子が生え、句碑に寄り添うように成長し今年竹となったのであろう。

地 どこからも見ゆる種播桜かな

気仙沼市 佐藤 綾泉

句評 苗代に種をまく季節に咲く辛夷の花を東北地方では種播桜と呼んでいる。春を早く告げてくれる花である。どこから見えるの表現で古木なのであろう情景がはつきり見える。

人 義経の逃れし道を鳥帰る

盛岡市 村井 康典

句評 義経は高館で討たれたのだが、逃亡説が今だにいきづいている。遠野・青森を通り北海道に渡り、モンゴル帝国の創設者ジンギスハンになったとのうわさもある。渡り鳥の往来する道でもある。

秀逸

句碑に合ふための細道竹の秋

大仙市 鈴木 仁

\*渡辺誠一郎選

天 落味噌を送れ東京には来るな

北秋田市 五代儀幹雄

句評 新型コロナウイルスの蔓延は、家族の絆にも影を落としている。「東京には来るな」の強い言葉と落味噌のほろ苦い味が、今の空気を確かに捉えている。

地 領袖にして青蜥蜴なり悪路王

一関市 江原 遅筆

句評 蜥蜴は、すばしっこく、尾を切つて敵から逃げるが、尾はまた再生する。青蜥蜴に、ヤマトを幾度も撃退した蝦夷の領袖とも言われる悪路王の姿を重ねる。「青蜥蜴なり」との断言がいい。青はみちのくの青そのものなのだ。

人 真綿引く妣が居るよな薄霞

栃木県 黒澤 信子

句評 薄霞に、真綿を引きのびしていた頃の亡き母の面影を見た。しかしその面影は、もはや鮮明ではないのかもしれない。

秀逸

光堂朗人朗人と蝉時雨

江戸川区 羽住 玄冬

\*照井 翠選

天 喰む音も食い尽してや蚕の眠り

一関市 村上 一誠

句評 蚕が桑の葉を噛む音は、実に凄まじいものだ。一匹だけでも凄い音だが、蚕部屋などになると、耳を塞ぎたくなくなるほどの音の洪水となる。作者には、桑の葉のみならず、咀嚼する音さえも食い尽くすように感じられたのだろう。眠る蚕の静けさとの対比も味わいがある。

地 陽を揉んでぜんまい乾ぶ一莛

湯沢市 加瀬谷敏子

句評 まさにぜんまいを干す作業の本質をすばり捉えた作品だ。ぜんまいを揉みながら乾燥させているのではない。あれは、陽を揉んでいるのだ。「一莛」との措辞から、乾燥させるために、ぜんまいをうまく散らしてある様も浮かび上がってくる。

人 黙読の子の唇痒し花あせび

雫石町 杉田 春雄

句評 授業中の光景だろうか。子どもたちが真剣に教材の文章を黙読しているのだろう。その唇の動きを「痒し」と把握した点が素晴らしい。一つひとつは小さいが、群れて咲く馬酔木の花は、まるで教室で勉強をする子どもたちの姿にも見えてきて効果的だ。

秀逸

夏立つや墨糸はじく宮大工

平泉町 北嶺 澄照

(秀逸、佳作は編者が適宜に掲出)

岩手県内中学校

特選

ひまわりや見つめる先に進路希望

二戸市立金田一中学校 三年 佐藤 朋子

頬撫でるひらりと桜応援歌

宮古市立津軽石中学校 三年 堀内 茉桜

岩手県内 小・中学校の部 (投句総数一〇六〇句)

岩手県内小学校

特選

はるのかげこちよこちよされておにごっこ

花巻市立太田小学校 一年 安藤 ひな

かたつむり雨が大きい角をだす

岩手大学教育学部附属小学校 二年 川村優香子

中尊寺緑の中の良き場所よ

久慈市立久慈湊小学校 六年 日當 創元

春寒し窓のすきまの風の音

二戸市立金田二中学校 三年 上屋敷愛翔

平泉小学校

特選

ゆうやけが田んぼの水をおどらせる

四年 石川 遥

ぼかぼかとうききなそらにさくらさく

四年 佐々木詩音

しんきゆうそらをおよぐよこいのぼり

四年 橋本 彩音

長島小学校

特選

大木を夢見て芽生える木の芽かな

六年 千葉 雅瑛

はつくしよんぼくの天敵スギ花粉

六年 山平 幹太

つくしさんすくすくのびてせいくらべ

三年 岩渕 怜奈

平泉中学校

特選

金鶏山葉桜の横ペダルこぐ

一年 後藤 綸世

かたくりのちようちんつるし灯をともす

一年 東郷 亜希

ついつうと空は渋滞母つばめ

三年 千葉 美月

柿熟るる平泉まで路線バス

自選五十句より 『暖響』二月号所収 熊倉よりこ

岩手路を照らす聖火や青葉風

『暖響』九月号 三上 佑子

青時雨光堂への磴ゆるく

『暖響』十月号 佐藤 瑞穂

山頭火の飲みし井の端水草生ふ

『草笛』四月号 岩渕 洋子

(ここ)まで来しを水飲んで去る 山頭火 昭和十二年六月

秀衡が跡にたはむる冬がらす

『草笛』四月号 金 淳子

野分晴金色光る中尊寺

『草笛』六月号 小林 秀司

光堂樋を流るる花の雨

『草笛』六月号 菅原 武男

西行の歌碑に寄り添ふ山桜

『草笛』八月号 木村 利子

泰衡の首洗ひ井やくつわ虫

『草笛』十月号 三浦百合子

参禅の子らを励ます雨蛙

『草笛』十月号 金 淳子

竹林より秋風の来る能舞台

草笛俳句賞二十句より 『草笛』十月号 小野寺東子

平泉古代の使者か蓮開く

『草笛』十月号 谷藤 風明

中尊寺様へ奉納今年米

「河北俳壇」宮城県大崎 京極 久也

骨寺の月も従へ落し水

みちのく「二夜庵」俳句大会 特選 砂金 眠人

水口の端に御幣の植田かな

「たばしね」五月号 岩渕 洋子

からからと絵馬が繰り出す春の風

「たばしね」五月号 鈴木 四郎



風薫る高館蒼き闇纏ふ

「たばしね」五月号

熊谷 初巳

鞘堂の根接ぎ柱や五月闇

「たばしね」六月号

北嶺 澄照

池之端玉解く芭蕉杖の跡

「たばしね」七月号

佐々木邦世

関山の鐘の窪みや木下闇

「たばしね」七月号

北嶺 澄照

棒稲架の螺旋整ふ達谷路

「たばしね」十一月号

岩淵眞理子

第六十一回 平泉芭蕉祭全国俳句大会

令和四年六月二十九日(水)

会場 毛越寺本堂

特別選者・講師

小澤 實 先生

(「澤」主宰／「読売」俳壇選者)

### 〔関山歌籠〕

〈西行法師追善法要献詠歌集〉

(令和三年四月二十三日)

ポップスのアレイナ・テイルキ聴いたなら気分は軽く街へ繰り出す  
畠山 和宏

高校に通う途中の渡し舟寒さにふるえた北上川  
小野寺ヨシ子

初孫に植えしゆずり葉の芽吹く朝古葉の落つる音ぞ身に染む  
佐藤 政勝

わが短歌の根っ子にあるは師範でのつめえりすがた青年教師  
千葉 明伸

邯鄲の石碑を前に佇めば及川和男の聲がきこえつ  
伊藤 英伸



中尊寺の松尾芭蕉像

落慶の光勝院の三尊にコロナ平癒をひたに祈りぬ  
千葉 利二

ギイと鳴る馬屋の木戸が珍らしく幾度もならす見学者たち  
村上 和子

日ごと飲む骨の密度を高めんと輝くルビーに似たる丸葉  
千田 庄子

コロナ禍で干柿のれん作れずに木枯しぬける師走軒下  
菅原 郁子

コロナでも通院に添ふは許さるる施設の夫に明日はまみゆ  
鈴木 幸子

小春日に残り毛糸を寄せ集め縞の模様のセーターを編む  
沼倉 郁子

自助のみで生き来しといふ寂聴さんペンを支へに退路を断ちて  
小野寺政賢

清衡の願ひ綴りしわが友の気概の墨跡中尊寺に見ゆ  
阿部 昭代

マスクした観光客が絵馬つるす東風吹き絵馬の木の音清し  
千葉 喜恵

津波の後十年になり復興進む兵の友「小舟に乗りて漁を楽しむ」と  
三浦 勇

束稲に山桜咲き賑わいぬ西行法師は宇宙の旅か  
晴山 京子

花の季節桃梅桜乱れ咲く美を愛で癒し心豊かに  
寺崎 敏子

諍いののちの心の高ぶりを水張田渡る風にはぐしぬ  
三浦 陽子

清衡公大遠忌の記念誌にコロナの鬱を余震を被う  
佐藤 峰子

昼餉とすピーピー草のおひたしよ春光食べるかシャリシャリの音  
千葉 泰子

令和三年の西行祭短歌大会は、新型コロナウイルス感染症防止の観点から中止。四月二十三日の西行法師追善法要の際に一関地方短歌会のみなさまから献詠歌集を御奉納いただきました。

昨年七月及び八月の豪雨をはじめ、度重なる自然災害により犠牲となられた方々に対し、心からお悔やみ申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

関山中尊寺

壊れたる人同志での会話はずむをほほえみて見つ  
名須川万里世

伊勢参りにゲートル巻き写りたる祖父の一度の長旅思ふ  
岩渕 初代

花売りの馬車が曲りて来るやうな春の日射しのこの石畳  
松村 雅子

ケチャップの容器を逆さにするごとく目の前の友の名前うかび来  
斎藤のり子

樹皮も失せ剥き出しなりし大松の幾年月が雪原に散りぬ  
餘目 圭子

旨き米「金色の風」を世に出すに八年かけしと甥は明かせり  
小澤 玲子

弟よ毎日祈りし快復の願ひ虚しく逝きませりとは  
佐々木信江

### 金色堂覆堂



「金色堂旧覆堂」と称されていますが、重要文化財指定名称は「金色堂覆堂」。正応元年（一二八八）、鎌倉幕府により金色堂を風雪から護るため建造されたと伝えられる堂で、金色堂の「昭和の大修理」の際、現在地に移築されました。近年の調査では、金色堂建立後五十年ほどで簡素な覆屋根がかけられ、増改築を経て現在の姿になったと考えられています。

## 御神事能番組

令和三年春の御神事能は感染防止のため、  
能舞台御法楽のみの執行と致しました。

### 秋の藤原まつり

十一月三日

素謡 一関喜桜会  
自然居士  
素謡 平泉喜桜会  
羅生門  
仕舞 一関喜桜会  
草紙洗小町 本澤 京子  
柏 崎 中村 玲子  
仕舞 中尊寺  
枕慈童 佐々木五大

## 〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

令和二年十二月一日〜令和三年十一月三十日

### □ 令和三年

十一月二十七日

於中尊寺

一隅を照らす運動陸奥教区本部研修会

山内より十三名参加

### □ 役職任免

(令和三年四月二十二日)

天台宗国際平和宗教協力協会顧問

中尊寺

奥山 元照

日中友好天台宗協会顧問

中尊寺

奥山 元照

### □ 住職任命

(令和二年十二月七日)

大徳院住職

佐々木宥司

### □ 褒章

(令和三年十月一日)

住職三十年勤続表彰

中尊寺

奥山 元照

### □ 教師補任

(令和三年二月九日)

権僧正

薬樹王院

北嶺 澄照

(令和三年四月二十一日)

権大僧正

中尊寺

奥山 元照

権少僧都

金剛院(副)

破石 晋照

律師

大徳院

佐々木宥司

大長寿院副住職  
実相院兼務住職

中尊寺

菅原 光聰  
奥山 元照

(令和三年六月一日)

寶性寺兼務住職

積善院

佐々木仁秀

天台寺兼務住職

利生院

菅野 宏紹



仕舞「枕慈童」(令和3年11月3日)

□ 経歴行階履修

(令和三年八月一日～九月五日)  
 四度加行履修 瑠璃光院法嗣 菅野 靖純  
 (令和三年九月九日)  
 入壇灌頂履修 瑠璃光院法嗣 菅野 靖純  
 (令和三年九月二十六日)  
 円頓大戒受戒会履修 瑠璃光院法嗣 菅野 靖純

雪中の能舞台



令和二年の十二月下旬は雪が降り続け、中尊寺は一時拝観停止となった。令和三年元朝、白山神社能舞台を撮影した一枚。能舞台にこれほどの雪が積もっている写真を見ることがない。写真の下部は見所なのだが、まるで月の表面のようにも見える。

御奉納者 御芳名

令和二年十二月～令和三年十一月  
 一 油彩画「能 秀衡」一点  
 松戸市 千葉由枝様



一 鑄地六十二間筋兜 一頭  
 名古屋市 加藤千博様

浄財御奉納者 御芳名

令和二年十二月～令和三年十一月  
 一関信用金庫様 三万円  
 海鋒 守様 五万円  
 (株)えさしわいらいネット様 三万円  
 最勝寺様 二十万円  
 (有)平泉観光写真社様 五万円  
 立正佼成会花巻教会様 三万円  
 鈴木紀子様 三万円  
 大徳寺塔頭 玉林寺住職 森 玉雲様 三万円  
 (有)千葉恵製菓 代表取締役 千葉正利様 十万円  
 最勝寺様 五万円  
 (株)空地音ハーモニー様 三万円  
 浄土宗岩手教区教務所様 五万円  
 合同会社ひらいずむ様 三万円  
 中野 勉様 五万円  
 最勝寺様 五万円  
 (順不同)

赤堂稲荷鳥居建立寄進 御芳名

令和二年十二月〜令和三年十一月		
平泉町	(有)小岩材木店様	一基
平泉町	(有)花立空調様・(有)平泉電力工業所様	一基
不動尊篤信御奉納者 御芳名		
令和二年十二月〜令和三年十一月		
青森市	佐々木幸子様	二十三万円
金ヶ崎町	(株)板宮建設 板宮一善様	二十万円
中野区	中村武司様	十六万五千元
一関市	(有)豊隆軌道 千葉美樹様	十一万円
山形県 最上町	大澤美佳様	十万五千元
大館市	高橋幸一様	十万三千元
秋田市	木村英夫様	五万五千元
大仙市	高橋紀美世様	五万円
平泉町	(株)北都高速運輸倉庫東北 小野寺勝彦様	四万円
栗原市	澤邊幸隆様	四万円
一関市	大和建工(株) 千葉哲也様	四万円
千葉市	渡邊良弘様	四万円

横浜市	瀬下 聡様	三万五千元
新宿区	(有)シー・エヌ・エス 中村武司様	三万五千元
郡山市	吉田志津恵様	三万五千元
銚子市	(株)イクオリティー 石毛裕之様	三万円
仙台市	(株)橋場総設 泉 笑子様	三万円
平泉町	一関信用金庫平泉支店様	三万円
一関市	及川元一様	三万円
一関市	小野寺清一様	三万円
半田市	川村弥瑛様	三万円
栗原市	(有)金成工務店様	三万円
仙台市	齋藤 哲様	三万円
一関市	山平様	三万円
一関市	割烹 炬ばた一八 渋谷正幸様	三万円
塩釜市	庄内千恵様	三万円
一関市	(株)精茶百年本舗様	三万円
一関市	(株)東北鉄興社様	三万円
一関市	東北建工企業(株) 今野幸宏様	三万円
一関市	橋本晋栄様	三万円
一関市	橋本友厚様	三万円

〈宝物紹介〉

義経画像



「判官びいき」の風潮を生み出した源義経の一生は、まさに英雄的かつ悲劇的のものであった。義経は美男子ではなかったともいうが、優しい好男子として描かれている。書籍、テレビでご覧になった方も多いであろうこの画像は、中尊寺に伝存している。

桃山時代(十六世紀)／中尊寺金色院蔵

平泉町	(株)フタバ平泉様	三万円
宮城県 南三陸町	山口 昇様	三万円
黒石市	(株)池田不動産 池田裕章様	季毎御供物
黒石市	(同)池田地建 池田裕章様	季毎御供物
青森県 南部町	(有)工銀青果市場 工藤一男様	季毎御供物
新潟市	松原晴樹様	季毎御供物
黒石市	(有)セイリュウ 佐々木政秀様	季毎御供物
弘前市	笹 隆治・哲子様	季毎御供物
平川市	長尾智子様	季毎御供物
二戸市	(有)岩食商事 米沢 修・励様	季毎御供物
水戸市	つくし 藤枝恵美子様	季毎御供物
高崎市	大門屋物産(株) 金色ダルマ(特大)二体	(順不同)

# 執務日誌抄

令和二年十二月一日（令和三年十一月三十日）

## 令和二年

### ◇十二月

- 一日 月次大般若（本堂）
- 二日 国宝「中尊寺金色堂保存修理工事」完了確認（文建協、小西美術、執事長ほか）
- 金色堂修理定例会議（文建協、小西美術、管財）
- 三日 光勝院建設委員会
- 七日 薬師会（讚衡蔵）
- 平泉観光推進実行委員会総務澄円 於役場
- 八日 平泉町文化財調査委員会管

- 修正会 弥陀供（金色堂）
- 八日 修正会 薬師供（讚衡蔵）
- 一字金輪仏・千手観音法楽修正会結願
- 十四日 慈覚会（御影供 本堂）
- 讚衡蔵運営委員会
- 光勝院建設委員会
- 文化財防火訓練
- 二十四日



### ◇二月

- 一日 月次大般若（本堂）
- 二日 節分会（日数心経 本堂）
- 三日 令和三年厄年祈祷会（護摩供 本堂）
- 十日 平泉観光協会理事会（執事長）

- 財章興（於平泉文化遺産センター）
- 十一日 讚衡蔵運営委員会
- 十三日 骨寺村莊園米奉納
- 十四日 弥陀会（讚衡蔵）
- 十五日 国宝「中尊寺金色堂保存修理」工事竣工法要（金色堂）
- 山田俊和前貫首泉勢功労賞授賞式（於盛岡グランドホテル）
- 十七日 白山会 本堂
- 十八日 初詣警備会議（総務・管財 於役場）
- 二十日 お経を読む会（利生院）
- 金色堂・讚衡蔵拝観停止大雪のため（二十七日）
- 二十一日 世界遺産登録十周年記念事業実行委員会総会（執事長 於役場）
- 二十三日 中尊寺節分講中総会（執事長、法務 於平泉商工会館）
- 二十四日 文殊会（経蔵）
- 二十八日 恒例御供餅つき
- 三十一日 午後三時 一山総礼

- 十二日 平泉文化観光振興基金運営委員会（執事長 於役場）
- 十四日 涅槃会御逮夜（本堂）
- 十五日 涅槃会（本堂）
- お経を読む会（大徳院）
- 十八日 平泉町上下水道事業運営協議会（管財五大 於役場）
- 二十五日 平泉観光協会通常総会（執事長 於観光協会）

### ◇三月

- 一日 月次大般若（本堂）
- 三日 平泉町文化財調査委員会管財章興（於平泉文化遺産センター）
- 五日 春の藤原まつり検討会議
- 九日 平泉観光協会理事会（執事長）
- 十一日 東日本大震災慰霊法要（貫首ほか 於陸前高田市小友地蔵尊）
- 東日本大震災物故者追善回向祥月命日法要（本堂）
- 午後二時四十六分 発生時刻打鐘・黙祷

## 令和三年

### ◇一月

- 一日 ○時 新年祈祷護摩供修行 九時 正月祈祷護摩（本堂） 十時半 総礼
- 修正会 釈迦供（本堂）
- 二日 九時 正月祈祷護摩（本堂）
- 修正会 薬師供（峯薬師 讚衡蔵） 午後三時 話初め（庫裡広間）
- 三日 九時 正月祈祷護摩（本堂）
- 修正会 山王供（本堂）
- 四日 修正会 薬師供（瑠璃光院薬師堂 工事中につき、光勝院にて）
- 五時 修正会 文殊供（経蔵）
- 寒修行（行者二名、町内托鉢。寒の入り（節分）
- 六日 修正会 釈迦供・月山御法楽（釈迦堂）
- 七日 修正会 白山十一面供（本堂）
- 大般若会（本堂）

- 東京オリピック聖火展示（本堂前）
- 十二日 瑠璃光院薬師堂落慶法要（貫首、一山各院）
- 十六日 世界遺産登録十周年記念事業幹事会（総務澄円 於役場）
- 十八日 平泉町世界遺産推進基金運営委員会（執事長 於平泉文化遺産センター）
- 十九日 基衡公御月忌（胎曼供 本堂）
- お経を読む会（地藏院）
- 二十日 春彼岸会法要（法華三昧 本堂）
- 二十二日 世界遺産登録十周年記念事業実行委員会（執事長 於役場）
- 二十四日 開山会（護摩供 開山堂）
- 春期定例一山会議
- 二十八日 源義経公東下り行列保存会 定期総会（法務宏紹 於役場）
- 二十九日 中尊寺菊まつり協賛会役員会（光勝院広間）
- 滋賀院門跡訪問（晋山挨拶 貫首、執事長）

三十日 青蓮院門跡、毘沙門堂門跡、三千院門跡、曼殊院門跡訪問(晋山挨拶 貫首、執事長)

◇四月

一日 月次大般若(本堂)  
四日 御修法「普賢延命大法」(十二日、貫首 於延曆寺)  
八日 仏生会(本堂)  
讚衡藏運営委員会  
お経を読む会(常住ノ亮王)  
十七日 弁材天堂大般若(利生院弁材天堂)  
世界遺産登録十周年記念事業開会式(執事長 於平泉小学校体育館)  
二十日 平泉をきれいにする会総会(管財晋照 於役場)  
平泉観光推進実行委員会幹事会(総務澄円 於役場)  
二十三日 ウェーサカ仏教会総会(法務 宏紹 於一閑松竹)

西行法師追善法要(本堂)  
光勝院建設委員会  
桜友会清掃奉仕(北参道)  
二十七日 平泉観光協合理事会(執事長)  
二十八日 平泉観光協合理事会(執事長)

◇五月

一日 藤原四代公追善法要(本堂)  
二日 開山護摩供(開山堂)  
四日 白山社祭礼御法楽(能舞台)  
六日 山王講(本堂)  
十一日 中尊寺中興第二十九世貫首奥山元照權大僧正晋山式(本堂)  
十三日 平泉観光推進実行委員会総会(執事長 於役場)  
十四日 世界遺産登録十周年記念事業幹事会(総務澄円 於役場)  
お経を読む会(真珠院)  
奉納演奏(弦楽四重奏Mカルテット 本堂)  
十六日 世界遺産登録十周年記念事業実行委員会総会(執事長 於役場)  
十七日 世界遺産登録十周年記念事業

十八日 光勝院建設委員会  
二十四日 平泉商工会通常総会(執事長 於平泉文化遺産センター)

◇六月

一日 月次大般若(本堂)  
光勝院建設委員会  
四日 伝教会(御影供 本堂)  
十一日 平泉町世界遺産推進協議会役員会(執事長 於平泉文化遺産センター)  
十三日 四寺廻廊法要(真珠院 執事長 法務ほか 光勝院)  
十五日 平泉芭蕉祭全国俳句大会実行委員会(総務澄円 於役場)  
十八日 東京オリオンピク聖火リレー(月見坂入口ノ金色堂前)  
世界遺産登録十周年特別講演会(貫首、澄円、秀法 於平泉小学校)  
二十日 自在房蓮光忌法要(本堂)  
光勝院建設委員会

二十四日 ウェーサカ祭典(法務 本堂)  
二十五日 平泉町世界遺産推進協議会総会(執事長 於平泉文化遺産センター)  
二十九日 第六十回平泉芭蕉祭全国俳句大会(光勝院)  
講師・特別選者 長谷川 權氏  
(講演記録 本誌掲載)  
平泉世界遺産の日平和の祈り(貫首ほか 本堂)

◇七月

一日 月次大般若(本堂)  
八日 讚衡藏運営委員会  
十日 お経を読む会(観音院)  
十三日 平泉観光協合理事会(執事長)  
十四日 不動堂控室屋根修理工事  
十七日 清衡公御月忌(胎曼供 本堂)  
二十七日 光勝院建設委員会  
二十九日 日光輪王寺、日光観音寺訪問(晋山挨拶 貫首、執事長)  
三十日 最勝寺、浅草寺、寛永寺訪

問(晋山挨拶 貫首、執事長)

◇八月

一日 月次大般若(本堂)  
二日 桜友会清掃奉仕(開山堂)  
四日 午後三時半 〈平和の鐘〉打鐘  
平泉大文字送り火警備会議(管財晋照 於役場)  
七日 夏堂籠り(十一日、結衆、開山堂)  
八日 四寺廻廊特別法話(執事長)  
十六日 第五十七回平泉大文字送り火  
施餓鬼会御速夜(本堂)  
二十四日 大施餓鬼会・放生会(本堂)  
二十七日 平泉町上下水道事業運営協議会(管財章興 於役場)

◇九月

一日 月次大般若(本堂)  
三日 泰衡公御月忌(金曼供 本堂)  
十七日 白符忌(本堂)  
十九日 赤堂稻荷例祭(護摩供)

二十三日 秋彼岸会法要(常行三昧 本堂)  
お経を読む会(天長寿院)

二十七日 平泉町文化財調査委員会(管財章興 於平泉文化遺産センター)

世界遺産登録十周年記念事業幹事会(総務五大 於役場)  
平泉観光協合理事会(執事長)

◇十月

一日 月次大般若(本堂)  
二日 慈眼会(本堂)  
讚衡藏運営委員会  
五日 中尊寺菊まつり協賛会役員会・実行委員会(光勝院)  
お経を読む会(向乗ノ五大)  
二十日 菊まつり開關法要  
二十八日 秀衡公御月忌(金曼供 本堂)  
二十九日 紅葉銀河(参道の紅葉を照らすノ十一月十四日)

◇十一月

- 一日 秋の藤原まつり開幕  
藤原四代公追善法要
- 二日 郷土芸能奉演(栗原 栗原神楽)  
お経を読む会(利生院)  
郷土芸能奉演(関 行山流舞  
川鹿子躍)
- 三日 仕舞「枕慈童」ほか奉演(能  
舞台)  
郷土芸能奉演(平泉 達谷窟毘  
沙門神楽)  
郷土芸能奉演(衣川 川西念佛  
剣舞)  
郷土芸能奉演(胆沢 朴ノ木沢  
念仏剣舞)
- 六日 第四十八回ひらいずみ芸術文  
化祭開会式(執事長 於平泉小  
学校体育館前)  
秋期企画「経蔵法楽」声明の  
夕べ(経蔵)
- 七日 第四十八回ひらいずみ産業ま  
つり開会式(執事長 於観自在  
王院跡)
- 九日 西行祭短歌大会実行委員会  
(光勝院)
- 十日 写経奉納式(本堂)  
第二十八回平泉町社会福祉大  
会(執事長 於役場)
- 十三日 奉納演奏(弦楽四重奏Mカル  
テット 旧覆堂)
- 十五日 菊まつり表彰式(光勝院)
- 二十日 岩手県立世界遺産平泉ガイ  
ダンスセンター開館記念式  
典(貫首、章興)
- 二十三日 酒田三十六人衆須藤秀明様来山  
天台会御逮夜(本堂)
- 二十四日 天台会(御影供 本堂)
- 秋期定例一山会議
- 二十五日 一関菊花会表彰式(管財章興)
- 二十六日 第二五七天台座主森川宏映猊  
下密葬(貫首、随行秀法 於滋賀  
院門跡)
- 二十七日 一隅を照らす運動陸奥本部研  
修会(講師 藤里明久師 光勝院)



稚児行列おつかれさま。  
(令和3年11月1日)

きとう えこう  
ご祈祷・ご回向のご案内

□ 当山祈祷道場不動堂にて祈祷勤修いたします。不動明王御宝前にてご祈祷後、お札とお供物をお授けします。志納金は一願五千円よりお申し込みいただけます。

例 厄除開運 家内安全 當病平癒 商売繁昌 良縁成就  
交通安全 学業成就 身体健全 受験合格 心願成就 等

□ 本堂ご本尊丈六釈迦如来御宝前におきまして先祖供養、水子供養、東日本大震災物故者供養を勤修いたします。ご供養の証として「追善殖福証」をお渡し(不要の方は当山にて奉納)いたします。志納金は一件三千円より。

例 ○○家先祖代々供養 ○○○居士(大姉) 供養  
○○家水子供養 東日本大震災物故者供養 等

※ご来山申し込みが難しい方は、ファックス等でもお申し込みいただけます。  
※ご不明の点は、中尊寺事務局法務部までお問い合わせください。

TEL 〇一九一(四六) 二二二一  
FAX 〇一九一(四六) 二二二六



殖福証



ご祈祷札



▽ 昨年は、世界遺産登録十周年、東日本大震災から十年、世界遺産暫定リスト登録二十周年にあたる年でした。

平成二十三年（二〇一一）六月二十六日、「平泉の文化遺産」の登録が決議されました。山田俊和貫首は記者会見し、「価値が認められ喜びと責任を感じる。東北地方に浄土の風が吹き、希望の光となれば」と述べられました。

三周年の年に「平泉」世界遺産登録は、精神的、文化的復興に向かおうとする東北の未来を照らす希望の光となった」という内容の記事に出会ったことを覚えていました。

今回、菅原執事長は「七宝荘厳と金銀和光」を執筆されました。

▽ 「光」が本号のキーワードと思い、長谷川 權先生の講演録「光堂とはなにか」を貫首の巻頭言に次いで収載しました。是非読んでいただきたい濃い内容です。

▽ 寄稿していただいた方々に感謝申し上げます。

（北嶺澄照）

寺報『関山』は、中尊寺ホームページで閲覧が可能です。  
ぜひご利用ください。 (<https://www.chusonji.or.jp/>)

中尊寺（寺報）『関山』第二十七号

令和四年（二〇三三）二月十日

発行 中尊寺

（執事長 菅原光聰）

〒〇二九一四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二

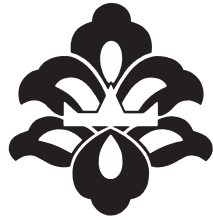
編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷（株）



### 久慈市立長内小学校6年生からのお礼の手紙

児童のひとり、「(前略) 中尊寺を見たのは初めてで、世界遺産に登録されたのも『たしかに!!』と思いました。なぜなら、金に光るように、周りもきれいに保つようにしたり、きたなくならないようにみんなで協力して、そうじをしたりなどいろいろ工夫をされていたので、すごい工夫だと思いました(後略)」と。すばらしい着眼点に心を動かされました。



〈発行 中尊寺〉